The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『宋高僧伝』と『広清涼伝』
Author(s)	河上, 麻由子
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要. 2025, 2, p. 1-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100810
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『宋高僧伝』と『広清涼伝』

河上麻由子

はじめに

唐代から五代十国期にかけて、中国仏教の中心地の一つとなったのが五台山である。五台山で活動した僧侶の行跡を探るには、各種経録中の僧伝、仏典翻訳時に作成された経序などの他に、まとまった史料として『宋高僧伝』と『広清涼伝』がある。

『宋高僧伝』は、贊寧が太平興国七年（九八二）に勅を奉じ、端拱元年（九八八）進上、至道二年（九九六）に補訂したものである。『広清涼伝』は、真容院延一が嘉祐五年（一〇六〇）に執筆を開始し、三ヶ月で完成したという。

先行研究では、『宋高僧伝』の史料価値は、さほど高くないとされるのが一般的であった。『宋高僧伝』の史料価値を批判した最初が陳垣である。西脇常記の解説によれば、陳垣が本書のもととなる講義を北京で行ったのが日中戦争最中の一九四三年であり、講義録をまとめた本書を刊行したのは一九五五年だった。(1) 日中戦争の最中にあって陳垣は、為政者に接近した贊寧を厳しく批判し、『高僧伝』を著した慧皎、『続高僧伝』を著した道宣に及ばず、それを本書の欠点とした。(2) 陳垣の見解の影響は強く、『宋高僧伝』の史料的価値には長く疑問が呈されてきた。(3)

他方の『広清涼伝』については、特にその史料価値に言及した研究はない。五台山僧侶である延一が、五台山で収集した資料――本稿でいう「資料」とは、伝記記述のソースとなった文献・口頭伝承をいう――に基づいて、五台山で活躍した僧侶の伝記を書いたのだから、当然その価値は高いと推定されてきた。

さて、『宋高僧伝』と『広清涼伝』の双方に伝記が残る僧侶は一九人である。記述を仔細に見ると、そのうち一七人の伝は、両者で文字がよく類似する。そこで本稿は、幾人かの伝を取り上げて両者の記述を比較することで、両者の史料価値を再検討する。

一　両者の類似表現とその資料

『広清涼伝』が載せる高僧の伝記は、『宋高僧伝』との関係において、以下の三つに分類できる。

（一）構成・ストーリーは基本的には一致するが、相互に無い情報を含み、しかし複数の文字が類似するもの…牛雲伝・仏陀波利伝・無著伝・神英伝・道義伝・法照伝・無染伝・智顒伝・窺基伝・志遠伝・澄観伝・常遇伝・願成（願誠）伝・乗方（業方）伝・法興伝・誠恵（誠慧）伝・匡嗣（光嗣）伝

（二）構成も文字列も、類似しないもの…道宣伝・無名伝[4]

（三）『広清涼伝』にしかないもの…福運伝・法珍伝・孫哲伝・神贇伝・恵龍伝・令休伝・嘉福伝・金光照伝・銓律伝・必救伝・取性伝・継顒伝・浄業伝・睿諫伝・両浙僧伝・揚州僧伝・道海伝・道演伝

史料編には（一）について、『広清涼伝』（最古の写本である高山寺写本、書写は永久五〈一一一七〉年。現在は前田尊経閣所蔵[5]。以下「前田本」と称す。）と『宋高僧伝』（南宋思渓版、浄土宗大本山増上寺所蔵三大蔵デジタルアーカイブを使用）を上下に並べて、旧字・新字の別なく、同じ文字をとる箇所を太字で示した。見えるまま翻刻することを原則としたが、異体字・略字は旧字を採用して表示した。写本には見せ消しなどの記号があるが、両史料の類似性を示すという本稿の目的に鑑み、便宜上これを省略し、修正後の本文のみを翻刻した。なお、写本には朱書きが施されているという。しかし筆者の手元にカラーのデータはなく、別稿にて写本全体の完全な翻刻を行う予定である。『宋高僧伝』翻刻において、草冠を離す処理は行わなかった。写本の脱字・破損を『大正新脩大蔵経』（以下『大正』）で補った箇所は□で示した。以下本文で引用する僧伝は、全て史料編から引用し、『大正』との差異は注に記す。[6]

右に挙げた僧伝のうち、（一）の法照伝には塚本善隆の論考がある。塚本は、『広清涼伝』「法照和尚入化竹林寺」（法照伝）と『宋高僧伝』法照伝には、五台山で法照が経験した霊験に関してほぼ同じ文がみられることから、両伝は同一の材料に基づいているであろうとす

る。その主たる材料としては、伝中に言及される霊験を記した石碑、法照が霊験について記した書物、王士詹による供養記を想定する。[7]塚本の議論に賛同するものであるが、両者が全く無関係に、しかし三つの資料を同じく参照したかには疑問を持つ。

以下は法照伝冒頭部分である。太字は共通する文字を示す。

釋法照、本南梁人。[8]未詳姓氏。唐大曆二年二月十三日、南嶽雲峰寺食堂内食粥。忽[9]向鉢中、見五臺山。佛光寺東北一里餘有山、々下有澗、々北有一石門。覺[10]身入石門、行五里許見一寺。題云「大聖竹林之寺」

『広清涼伝』巻中

釋法照、不知何許人也。大曆二年、棲止衡州雲峰寺、勤修不懈。於僧堂内、粥鉢中忽睹五彩祥雲、雲内現山寺。寺之東北五十里已來有山、山下有澗、澗北有石門。入可五里有寺。金牓題云「大聖竹林寺」。

『宋高僧伝』巻一一

『広清涼伝』は法照の出身地を南梁とするのに対し、『宋高僧伝』は出身地を不詳とするなどの差異はあるが、情報の順序、使用される文字は似通っており、塚本がいうように、両者が記述のベースに用いた資料が同一であることは間違いない。[11]

本伝中盤から『宋高僧伝』には省略が多くなる。特に仏陀波利が登場する箇所は、「（その事績を）語る（文）は覚護の伝にある（語在覺護傳）[12]」とあるように、記述は『宋高僧伝』仏陀波利伝にある。とはいえ、文字と大まかなストリーは一致しながらも、各所で文字が異なるということは、末尾を除いた法照伝の全体で確認できる。

一致の背景として塚本が注目したのが、法照が一梵僧に出会い、この梵僧に勧められて自らの経験した奇瑞を記したとある箇所である。

法照食已、身意泰然。廻至大聖前、作禮辞退。還見[13]二童子、送至門外。禮已擧頭、遂隱不見。師乃愴然、倍増悲感。遂①立石題記、今猶在焉。

『広清涼伝』巻中

食已、身意泰然。造大聖前、作礼辭退。還見二青衣、送至門外。礼已擧頭、遂失所在。倍増悲感。乃①立石記至今存焉。

『宋高僧伝』巻一一

法照方依所教、②具前逢遇實録示衆。(14)(15) 江東釋恵従、以大暦六年正月九日、(16)與花(17)厳寺僧崇暉・明謙等三十餘人、隨法照至金剛窟所、親遇般若院所、立石標誌。同行徒衆、虔誠瞻仰、悲喜交集。倏聞其處鏗然鍾聲。(18) 清音雅亮。衆咸驚歎霊異。謂照師(19)「所見不虚」。俱念宿縁多幸、得与同遊、③書之精舍屋壁、普使見聞、同發勝心、共期佛果。

『広清涼伝』巻中

②照聞斯語、便隨憶念録之。時江東釋慧從、以大暦六年正月内、與華厳寺崇暉・明謙等三十餘人、隨照至金剛窟所、親示般若院、立石標記。于時徒衆、誠心瞻仰、悲喜未已。遂聞鐘聲。其音雅亮、節解分明。衆皆聞之、驚異尤甚。驗乎所見不虚。③故書于屋壁、普使見聞、同發勝心、共期佛慧。

『宋高僧伝』巻一一

塚本は、①の「石記」、及び②の「實録」(20)というべき資料を、賛寧と延一がそれぞれ用いたとする。塚本は③に言及しないが、これも資料となった可能性はある。

しかし両者が別個に①②の資料を参照したにしては、①②③の作成された経緯に関する記述が、両伝で酷似することが気にかかる。さらにいえば、上の引用箇所以降も、塚本が第三の資料としてあげた王士詹の「石紀」(『宋高僧伝』では「聖寺記」)の引用が始まるより前、大暦一二年に法照が弟子たちと奇瑞をみたという箇所までは、両伝のストーリーと文字は一致する(史料編参照)。とすれば、冒頭から大暦一二年の奇瑞までを記した法照の伝があり、両者はいずれもそれを資料に使用したと考える方が自然である。(21)

ともあれ、同じ資料を同じ順序で引用しているのは、両伝が無関係に成立したわけではないを示す。共通した資料を記述の素材としたらしいことは、他僧の伝にも確認できる。無著伝を挙げよう。

『広清涼伝』「無著和尚入化般若寺」（無著伝）は、前半には『宋高僧伝』にない情報が多いが、後半には共通する文字が多くなる（史料編参照）。『広清涼伝』無著伝末尾近くには、汾州菩提寺（前田本『広清涼伝』では「菩薩寺」）の修政等六人に、無著が自らの経験を語り、それを記録したというくだりがある。

そこで無著の口述をもって、実の如くそれを記録し、遠近に伝え、後にこの記録を見るものが、霊験あらたかな五台山を思念せしめるようにした。無著が（寺院を）興修し供養した事については、具さに別録が記載するとおりである。（乃依無著口、依實録之、傳於遐邇、覩後覽之者、注想霊峰矣。其无着[22]、興修供養事[23]、具如別録所載[24]。）

『広清涼伝』巻中

右より、無著が五台山で経験した霊威を振り返って口述し、それを筆記した書物が存在していたこと、『広清涼伝』無著伝はおそらくその霊験記によりつつ、しかし延一の手元には無著が手がけた「興修供養」をまとめた「別録」と称されるべき資料もあったことがわかる。

『広清涼伝』無著伝末尾には「さらに『華厳鈔』にいうことには（又花厳鈔説）」として、『宋高僧伝』にはない情報が記される。また、『広清涼伝』無著伝前半の無著が五台山で童子と問答したことは、汾陽善昭（九四七～一〇二四）の『汾陽無徳禅師語録』巻二にある。[25]

他方、『宋高僧伝』巻二〇無著伝の末尾には「元和中に、（無著の）門人である文一が追述した（元和中、門人文一追述焉）」とある。門人が「追述」したのは、無著の伝に違いない。『宋高僧伝』と『広清涼伝』の無著伝の構成が基本的に一致し、複数の箇所で文字列が共通するからには、賛寧が所持していたのは、延一所持と同じか、またはそれと同系統――ここでいう「同系統」とは、もととなる資料に加筆・修正が施される、あるいは書写時に誤写されるなどにより、記述に差異の生じた資料をいう――の無著伝だったと推定できる。

他にも、『広清涼伝』志遠伝と『宋高僧伝』志遠伝の冒頭部分には、

釋志遠、俗姓宋氏、汝南人也。早喪所天、孤養於母、承順顔色、晨夕靡倦。[26] 母常讀法花經、精通五卷。師因夙植善本、毎念辭榮。年二十八、乃啓母出家、事師之礼、服勞无替。

『広清涼伝』巻下

釋志遠、俗姓宋氏、家于汝南。其父早喪、孤侍孀親、承顔之禮、匪遑晨夕。母常念法華經、精通五卷。遠識度明敏、孤標卓然。年二十八、辭親從師。

『宋高僧伝』巻七

とあり両者はよく類似する。ただし『広清涼伝』志遠伝は、僧詳『法華伝記』志遠伝冒頭の

釋志遠、俗姓宋氏、江南人也。早喪其父、孤養於母、承順顔色、朝夕無違。天性聰利、穎悟法華、生年十八、啓母出家、事師之禮、服勞無替。

『法華伝記』『大正』五一、五九頁a一三〜一六

とほぼ一致するから（傍線部は『広清涼伝』との一致箇所を示す）、『広清涼伝』志遠伝は、『法華伝記』志遠伝、またはそれと同系統の資料を参照したと推測できる。ただし『広清涼伝』志遠伝と『宋高僧伝』志遠伝が、志遠を汝南出身都で二八歳の時に出家したとするのに対し、『法華伝記』志遠伝は江南出身で一八歳の時に出家したとする。出家年については、卒年と僧臘から計算して『広清涼伝』『宋高僧伝』が正しい。[27]

『広清涼伝』志遠伝と『宋高僧伝』志遠伝は、志遠死去時の記載もよく類似する。[28]

至會昌五年、忽絶粒數日、而講課之務、未曾暫息。及二月十七日、告門人曰、「吾平生修進、不欺心口。[29] 今獲二種果報。臥安眠覺、

而无痛惱」。「吾所著法花疏十巻、本迹二門、三周記別、開近顕遠。玄門十巻、五義判尺。止觀十巻、其天台宗疏、務在宣闡。並使傳通、勿令止絶」。言訖、奄然而逝。春秋七十七、僧臘四十八。

『広清涼伝』巻下

洎會昌四年、春秋七十七、僧臘四十八。忽絶食數朝、而說法罔憚。以二月十七日、誡門人曰、「吾自生修進、不欺心口。今獲二種果報。臥安覺安、而無痛惱」。又曰、「天台宗疏、務在宣傳。法華疏十巻、本迹二門、三周記別、開近顕遠。玄文十巻、五義判釋。止觀十巻、境觀雙修。不定頓漸、八教麤妙、遮照平等、行解圓明。一多相即、一藏文句、瑩玉摧金、將踐聖階、降茲罕及。礼懺方等、必假精誠。志之永懷、副吾之意也」。

『宋高僧伝』巻七

右の類似から、賛寧と延一は志遠伝執筆にあたり、同じ資料か、同系統に属する資料を用いていたことがわかる。なお、右引用箇所にあたる記述は、『法華伝記』にはない。

『広清涼伝』志遠伝冒頭部分が、『法華伝記』志遠伝を参照したようにみえながらも、一部の情報は『宋高僧伝』志遠伝と共通するのは、『宋高僧伝』と『広清涼伝』のみならず、『法華伝記』も加えた三伝が、同じ系統に属する資料を用いていたからであろう。『法華伝記』にのみ微細な差異が認められるのは、資料の系統の違いによると思われる。なお、『広清涼伝』志遠伝には、五台山入山以前の修行に関する部分と、死去時の奇瑞に関する部分がない。延一が、志遠伝の素材となった資料から、五台山に関連する部分のみを抜粋したためだろう。

この他、経典目録中の僧伝や経序も材料に用いられた。『宋高僧伝』「仏陀波利入金剛窟」（仏陀波利伝）と『広清涼伝』仏陀波利伝は、冒頭の文字は類似するが（太字）、五台山到着以降の記述については差異がある。『宋高僧伝』にはなく、『広清涼伝』にみえる記載は、「仏頂尊勝陀羅尼経序」とおよそ一致する（傍線部）。

佛陁波利者、唐言覺愛、北印度罽賓国人。[33] 亡身徇道、遍觀霊跡、聞文殊師利在五臺山[34]清涼山、遠渉流沙、躬来礼謁。以唐高宗大帝儀鳳元年至五臺山。[35] 南陟思陽嶺、見林木干雲、景物殊勝、内心欣懌、[36] 五體投地、向山頂禮曰、「如来滅後、衆聖潛霊、惟有大聖文殊師利、於此山中、汲引群生、教諸菩薩。波利所恨、生逢八難、不睹聖容。遠渉流沙、故来礼謁。伏乞慈悲普處、[37] 令覲尊儀」。言已、悲泣雨涙、[38] 向山頂礼。

『広清涼伝』巻中

釋佛陁波利、華言覺護、北印度罽賓國人。忘身徇道、遍觀靈跡。聞文殊師利在清涼山、遠渉流沙、躬來禮謁。以天皇儀鳳元年丙子、杖錫五臺。虔誠礼拜、悲泣雨涙、冀睹聖容。

『宋高僧伝』巻二

佛頂尊勝陀羅尼經者、婆羅門僧佛陀波利、儀鳳元年、從西國來至此漢土、到五臺山次、遂五體投地、向山頂禮曰「如來滅後、衆聖潛靈。唯有大士文殊師利、於此山中、汲引蒼生、教諸菩薩。波利所恨、生逢八難、不覩聖容。遠渉流沙、故來敬謁。伏乞大慈大悲普覆、令見尊儀」。言已、悲泣雨涙、向山頂禮。

「仏頂尊勝陀羅尼経序」『大正』一九、三四九頁b四～一〇

来唐以前の記録は「仏頂尊勝陀羅尼経序」になく、『広清涼伝』仏陀波利伝の記載は『宋高僧伝』仏陀波利伝と相似する。ただし『宋高僧伝』仏陀波利伝自体が、下掲の『開元釈教録』とほぼ一致する（傍線部）。

沙門佛陀波利、唐言覺護、北印度罽賓國人。忘身徇道、遍觀靈跡、聞文殊師利、在清涼山、遠渉流沙、躬來禮謁。以天皇儀鳳元年丙子、杖錫五臺、虔誠禮拜、悲泣雨涙、望覩聖容。

『開元釈教録』巻九、『大正』五五、五六五頁a七～一一

『宋高僧伝』はもちろん、それと相応する『広清涼伝』仏陀波利伝の冒頭は、『開元釈教録』か、[39]あるいはそれをもとにした／そのもとになった、仏陀波利伝に依ったのだろう。

なお、上に引用した冒頭部分以降も、『宋高僧伝』仏陀波利伝の記述は『開元釈教録』と、『広清涼伝』仏陀波利伝の記述は「仏頂尊勝陀羅尼経序」と酷似する。ただし通行本の『広清涼伝』は（太字は『宋高僧伝』との一致を示す）、「仏頂尊勝陀羅尼経序」とはやや異なり（傍線部は『広清涼伝』との一致を示す）、

高宗大帝、遂留經入内。請日照三藏法師、及勅司賓寺典客令杜行顗等、共譯唐本、勅賜絹三千匹。

『広清涼伝』巻中『大正』五一、一一一一頁b一三～一五

大帝、遂將其本入内。請日照三藏法師、及敕司賓寺典客令杜行顗等、共譯此經、敕施僧絹三十匹。

「仏頂尊勝陀羅尼経序」『大正』一九、三四九頁b二五～二七

と、高宗から翻訳の褒賞として下賜された絹を三千匹とする（史料編にあるように、前田本は「三十疋」）。下賜品については、『宋高僧伝』（太字は『広清涼伝』との一致を示す）と『開元釈教録』（傍線部は『宋高僧伝』との一致を示す）でも三十匹とある。

天皇賞其精誠、崇斯祕典、下詔鴻臚寺典客令杜行顗與日照三藏、於内共譯。譯訖賜絹三十匹、經留在内。

『宋高僧伝』巻二

天皇賞其精誠、崇斯祕典、遂詔鴻臚寺典客令杜行顗及日照三藏、於内共譯。譯訖儎絹三十匹、經留在内。

『開元釈教録』『大正』五五、三六九頁a二三～二五

ここは「仏頂尊勝陀羅尼教序」以下に従い「十」を取るべきである。『広清涼伝』改版時の定本に誤りがあったか、あるいは改版までの過程で、仏陀波利の功績を強調するための誇張が施されたかのどちらかであろう。[40]

以上のように延一は、贇寧と同じ僧伝・碑文・経序などを執筆の素材に用いていた。そのため一七人の僧侶の伝において、両書の構成は一致し、文字も類似したのであろう。

そもそも『広清涼伝』の編纂は、

（前の勾当五台山寺司公事である郄）済川はこのようなこと（五台山の記録が失われていくこと）を嘆き、そこで真容院の妙済大師延一公を訪ねた。この人は純粋で聡明鋭敏、広く蔵教に通じており、講説記問、精通しないことはなかった。そこで公に願い、①経伝より拾い採り、②故実を収め拾い、③祥伝を付け加え、推してこれを広げ、三巻に納めた。（本書には、五台山の）吉祥・隆世・因地よりはじめて、巨宋の化相に逢うまでを尽くした。名付けて『広清涼伝』とした。およそ三ヶ月で成った（済川慨其若是、乃訪得真容院妙済一公。其人純粋聰敏、博通蔵教、講説記問、靡不精詣。因請公、①採摭經傳、②收捃故實、③附益祥傳、推而廣之、勒成三巻。首以吉祥降世因地、終以鉅宋親逢化相。名曰『廣清涼傳』。凡三月而成。）[41][42]

「広清涼伝序」

とあるように、三つの資料により執筆された。

①の「経伝」とは、経典の序文や僧伝――弟子たちがまとめた行跡で、それ単体として流通したものや、[43]経典目録などに収録されたりしたもの、『法華伝記』のような書物、あるいは『宋高僧伝』も含むかもしれない――を指す。

②の「故実」とは、五台山内で相伝された説話・碑銘を指すのだろう。例えば、「王子燒身寺の必救都綱」の行跡を、「諸の古老が口伝えに授けてきたところによると（蓋聞諸古老口相傳授）」として記すのがこれにあたろう。延一は、諸僧の舎利塔にしばしば言及する。それら舎利塔には碑銘を伴うものもあっただろう。

その上で延一は、③「祥伝を付け加え」、三ヶ月で本書を完成させたという。延一は『広清涼伝』上巻でしばしば、『霊跡記』なる書物

を参照する。書名からして、五台山での霊験を集めた書物とおぼしい。『広清涼伝』の諸僧の伝には、往々にして、五台山での霊験が『宋高僧伝』よりも詳しく記されるが、それらは『霊跡記』などの書物により加筆されたのだろう。

先述したように、先行研究では、『広清涼伝』の史料価値は高く、『宋高僧伝』は権力者におもねるなどの問題があるとされてきた。しかし（一）として挙げた各僧伝は、『宋高僧伝』と『広清涼伝』で構成・ストーリー・文字が類似しており、贊寧と延一はしばしば、同じ資料、乃至、同じ系統の資料を用いていたと認められること、『広清涼伝』は山内の古老が伝える説話や『霊跡記』などで加筆されていること、三ヶ月という短期間で書かれたことを考慮するに、『宋高僧伝』の史料価値は『広清涼伝』におおさ劣るまい。(44)

二　『広清涼伝』の取捨選択

同じ資料、乃至同じ系統の資料を用いながらも、両者はそれぞれの執筆目的・興味関心から、記述を大幅に省略することがある。ここでは特に、『広清涼伝』誠恵伝・願成伝が一部の政治的交流を記さないことを述べ、延一の執筆態度に若干の分析を加える。

『宋高僧伝』誠慧伝と『広清涼伝』降龍大師伝（誠恵伝）は、文章構成は大変似通っており（太字）、両者が同じ、乃至、同一系統の資料にもとづいて書かれたことは明らかである。ところが、『宋高僧伝』は五台山の権威が宣揚され、諸国の珍宝が至るようになった（後半太字部分）契機を、誠慧と李克用の交流にあると述べるのに対し（傍線部）、『広清涼伝』は当該部分がない。そのため『広清涼伝』では、誠慧が王子寺の寺主となったことが、供物が五台山に集まる契機になったかのように読める。

後有王子等僧湛崇等、率衆連書、慇請住寺、展師資礼。師不違来、願従居彼寺。故得金峰増耀、寶壤騰芳、九州之琛賾皆来、十寺之樓臺益盛。(45)(46)(47)

『広清涼伝』巻下

有王子寺僧湛崇等、請居茲寺。慧主任之餘暇、内外典教、靡捨斯須、供贍精嚴、非不勤恪。恒轉華嚴經數盈百部。毎至巻終懇發願曰、

『以我捧經之手、救彼苦惱之人』。而属武皇興梁太祖、日尋干戈、中原未定。武皇中流矢、創痛楚難任。思憶慧師、翹想焚香、痛苦乃息。遥飛雁帛、遠達雞園、命下重巒、迎歸丹闕。武皇躬拜、感謝慈悲、便號「國師」矣。後乞歸本寺。金峰顯耀、玉樹相依、九州之珍寶皆來、百寺之樓臺普建。」

『宋高僧伝』巻二七

李克用と五台山僧侶の交流を書かないという態度は、『広清涼伝』願成伝にも確認できる。両書の願成伝（願誠伝）は、史料編で示したように、願誠誕生時の奇瑞、出家の経緯、会昌の廃仏にあうまではストーリ構成が一致する。ところが、『宋高僧伝』は宣宗（在位八四六～八五九）から師号を賜った経緯として、願誠と李氏との交流に言及するのに対し（傍線部）、『広清涼伝』は李氏との交流を記さない。[48]

宣宗皇帝即位、重興佛寺、山門再選名徳、[49]師為其首、特許脩營佛光一寺。功畢、尋頒命服、師号「圓相」、就加山門都檢校。

『広清涼伝』巻下

及大中再崇釋氏、選定僧員、誠獨爲首矣。遂乃重尋佛光寺、已從荒頓、發心次第新成。美聲洋洋、聞於帝聽。飄馳聖旨、雲降紫衣。後李氏奄有并門。遐奉文殊、躬遊聖地、睹其令範、撫手愜懷、表聞唐天子。相繼乃賜大師號「圓相」也。就加山門都檢校。

『宋高僧伝』巻二七

唐の衰退と節度使の割拠という五台山をとりまく当時の政治状況から、五台山地域を領域下におさめる李氏が五台山の檀越に取り込まれていくのは自然である。後唐建国の正当性を五台山僧侶が保証したことを考えれば、『宋高僧伝』のいう願誠・誠慧と李氏との交流は、史実を反映していたと想定してよい。[50]

ただし延一は、後唐李克用と誠恵との交流を記さない一方で、紫衣と師号を与えようとした荘宗の同光元年七月の勅書を引用し、誠恵

がそれを固辞した後、再び荘宗は発した詔も略出する。[51] ここで想起したいのが、延一が、中原で即位した皇帝以外を「偽」として排除していることである。

聖宋の太宗皇帝（在位九七六～九九七年）が即位されるや、神武と天質（を備えていたため）、（北漢の）偽主をうち平らげ、この宇宙を重ねて広げ、生霊を再造したのである。（聖宋太宗皇帝踐位、神武天資、克平偽主、重恢宇宙、再造生霊。）

「安生塑真容菩薩」『広清涼伝』巻中

晋天福三年戊戌歳（九三八）、諸方に遊行して教化して湖南に至り、偽国主の王公に謁した。（教化を受けて）公は香茶盈万を施した。（晋天福三年戊戌歳、遊方行化至湖南、謁偽国主王公、々施香茶盈萬。）[52]

「超化大師匡嗣伝」『広清涼伝』巻下

偽漢の高祖は、一目で師を奇表と見抜き、得難い人材であると歎じ、特に命じて諸王と兄弟とした。（中略）偽漢の天会十七年（九七三）正月十二日に、五台山菩薩院（真容院）で死去した。享年は七十三、僧臘は五十三だった。偽諫議大夫楊夢申に詔して、神道碑銘を撰述させ、（神道碑を）院の西北に立てさせた。門人は霊骨を収めて塔を建立した。（この塔は）いまも在る。（偽漢高祖、一見之師奇表、歎未曽有、特命与諸王為兄弟。（中略）以偽漢天會十七年正月十二日、遷滅於五臺山菩薩院。享年七十三、僧臘五十三。[53] 詔偽諫議大夫楊夢申、撰神道碑銘、立於院西北。[54] 門人收霊骨建塔。猶在。）[55]

「僧統大師劉継顒伝」『広清涼伝』巻下

偽主劉氏も、深く（浄業を）崇仰し、紫衣を賜り、号を「広恵大師」とした。天会十一年（九六七）に至り、僧衆は（浄業に）山門都監となることを望んだ。ついで聖宋の太宗皇帝が戎輅を率いて親征し、晋邑を平らげ（北漢を滅ぼし）た（九七九年）。師は真主にめぐり逢ったことを喜び、そこで僧徒を率い、行宮に詣って（太宗に）見え、（太宗に対する）誠款を申し上げた。（中略）（太宗

が帰京するや）そこで命服を賜り、号を「崇教大師」と改め、台山僧正に抜擢した。（さらに）全山に劉氏が賜わった紫衣や師号に応じて、並びに偽を改めて（北宋が新たに賜る）真（の紫衣や師号）に従わせた。（偽主劉氏、深所崇仰、乃賜紫衣、加号「廣恵[57]大師」。至天會十一年、僧衆[58]請充山門都監。尋属聖宋[59]太宗皇帝戎輅親征、克平晉邑。師喜遇真主、乃率領僧徒、詣行宮脩覲、陳其誠款。（中略）乃賜命服、改号「崇教大師」、仍擢為臺山僧正。應闔山劉氏所賜紫衣[60]師号、並改偽従真。）

「淨業伝」『広清涼伝』巻下

（睿諫は）本山に帰ると、工を募り（伽藍を）修建しようとした。また太原に詣って、偽主たる劉氏に謁見し、同じく厚賚を被った。（暨廻本山、募功[61]修建。復詣太原、謁偽主劉氏、亦蒙厚賚。）

「睿諫伝」『広清涼伝』巻下

延一が偽とするのは北漢と「湖南」の「王公」（「王公」について『宋高僧伝』には「忠懿王王氏」、すなわち王審知とあり、ここでいう「湖南」が閩を指すことがわかる）であり、北魏・唐・五代諸王朝などの皇帝たちは偽とは記されない。『広清涼伝』に登場する五代十国の為政者としては、匡嗣伝に「湖南馬王」（楚）「尚父元帥錢王」（呉越）も登場するが、彼らは「偽」とされない。これは楚と呉越は中原王朝から王に冊封されたのに対し、北漢・閩の君主が皇帝を称したからであろう。特に、延一が繰り返し「偽」とした北漢は、延一が『広清涼伝』を執筆した当時、中国を支配していた北宋と対立して滅ぼされた政権でもある。[62]

延一は、中原王朝を正統とする立場をとっており、そのため皇帝として即位することなく、むしろ唐の禅譲を受けた後梁と対立した李克用については、彼が五台山僧侶の檀越となったことを『広清涼伝』に記さなかったのではあるまいか。

おわりに

本稿は、『宋高僧伝』と『広清涼伝』の両書に伝が収められる一七人の僧侶の伝が、構成・ストーリー・文字が似通っていることを整

理し、賛寧と延一はしばしば、同じ資料、乃至、同じ系統に属する資料を執筆に用いたらしいことを明らかにした。『広清涼伝』は山内の古老が伝える説話や『霊跡記』などで加筆されていることを考慮するに、『宋高僧伝』の史料価値は『広清涼伝』に劣るまい。

右に加えて、『広清涼伝』願成伝・誠恵伝は一部の政治的交流を記さないことについて、中原王朝を正統とする延一の歴史観が影響している可能性を指摘した。

さて、五台山仏教勢力と政治権力との関係については、唐代を中心に優れた研究が積み重ねられてきた。他方、唐滅亡後、北宋建国以前の五台山が議論されることはさほど多くない。

唐滅亡後、巨大な教団の維持を図る五台山は、どのような手段を取り得たのか。存続を模索する五台山のあり様を、『宋高僧伝』の記載を用いながら、『広清涼伝』と比較しつつ慎重に分析するべきであるが、紙幅も尽きたのでそれについては別稿に尽くしたい。

注

（1）陳垣著、西脇常記・村田みお訳『中国仏教史籍概論』（知泉書館、二〇一四年）解説部分一五頁。

（2）『中国仏教史籍概論』解説部分、一五～一二頁。

（3）詳しい研究史は、楊志飛『賛寧『宋高僧伝』研究』（巴蜀書社、二〇一六年）を参照されたい。

（4）無名伝は、出身地と舎利塔建立を伝える箇所についていくつか共通するが、内容は全く一致せず、よって（二）に分類した。他方、澄観伝など一致部分が極めて少ないものも、本稿では、類似した文字列が複数あれば（一）に分類してある。

（5）小野勝年氏は、『参天台五台山記』熙寧五年（一〇七二）一一月二九日条に、成尋が著者である延一から『広清涼伝』の版本を譲り受けたとあることに着目し、成尋が死去した後に遺品とともに『広清涼伝』が将来されたのであり、前田尊経閣所蔵写本はその伝写本としてもっとも原本に近いだろうと指摘する（小野勝年「古清涼伝・広清涼伝解題」『国訳一切経　史伝部一八』大東出版社、一九六二年、八～一〇頁）。

（6）『大正』が踏襲した『大日本続蔵経』は、光緒一〇年（一八八四）の「唐碑館」本を底本としており、この「唐碑館」本は、明洪武年間の山西崇善寺刊本に基づく（小野勝年前掲「古清涼伝・広清涼伝解題」九頁）。本文で検討する法照伝に関連して、「唐碑館」本・『大正』の『広清涼伝』をみると、「再祝曰、『請分爲千』。尋卽便分、復變爲三。行行相對、遍於山半」とあるが、前田本では「再祝曰『請分為千盞燈』、又分

千盞。行々相對、遍於山半」とある。宋版『宋高僧伝』では「重請『分爲千炬』、言訖便分千數。行行相對、遍於山半」とあるのみである。同じく法照伝で「文殊告言『此世界西、有阿弥陀佛、彼佛願力、不可思議。（以下略）』」とある箇所は、「唐碑館」本・『大正』には「文殊告言、『此世界西、有極樂國、彼當有佛、號阿彌陀。彼佛願力、不可思議。（以下略）』」とある。宋版『宋高僧伝』では「文殊言『此世界西、有阿彌陀佛。彼佛願力、不可思議。（以下略）』」と、前田本と一致する。

すなわち二つの傍線部は、「唐碑館」本に至るまでに加筆されたもので、前田本や宋版『宋高僧伝』が素材とした資料にはなかったものであろう。

なお、下巻末の明崇による補遺が前田本にはないのみならず（小野勝年前掲「古清涼伝・広清涼伝解題」一〇頁）、法照伝に続いて記載される、紹聖五年（一〇九八）六月の寺院復興記事なども、前田本には収録されない（同右、九五頁）。前田本が、一一世紀末以降の加筆が施される前、延一その人が監修した版本を祖本としていたことは明らかである。

（7）塚本善隆「唐中期の浄土教　特に法照禅師の研究」（『塚本善隆著作集』巻四、一九七六年、初出一九三三年）三〇八～三一六頁。

（8）「釋法照、本南梁人」、『大正』は「釋法照者、本南梁人也」。

（9）「忽」、『大正』は「照」。

（10）「覺」、『大正』は「自覺」。

（11）相違点もある。『広清涼伝』は、法照の出身を南梁とし、粥中に五台山仏光寺を見るという奇瑞が生じた日付など（『宋高僧伝』は年次のみ）、『宋高僧伝』にはない情報を含む。このほか、『宋高僧伝』は粥中に現れた寺の名を記さないが、『広清涼伝』はこれを仏光寺とする点、寺と石門の距離を前者は五〇里とするが、後者は一里にする点で相違する。石門から五里で竹林寺に至ったというのは同じであるから、『宋高僧伝』に従えば竹林寺と仏光寺の距離は五五里、『広清涼伝』に従えば六里となる。

（12）宋版は「救」と書く。『国訳一切経』に従い、「護」（仏陀波利の唐名は覚護）とする。

（13）「還見」、『大正』は「遣」。

（14）「實」、『大正』は「寔」。

（15）「示衆」、『大正』は「一一示衆」。

（16）「正月九日」、『大正』は「正月初九日」。

（17）「花」、『大正』は「華」。前田本は、『大正』が「華」と書く箇所をほぼ「花」と書く。以下は繁を避けるため本文に引用する前田本『広清涼伝』中の「花」と、『大正』中の「華」の異同は示さない。

（18）「鍾」、『大正』は「鐘」。

（19）「謂照師」、『大正』は「果特謂照師曰」。

（20）「實録」とは、林韻柔は円仁が将来した「五台山大聖竹林寺釈法照得見台山教界記」であり、賛寧と延一はそれを参照したのであろうとする（「記憶与実践　法照伝記的化境叙事与歴史記憶」『唐代仏教群体的記憶与信仰実践』稲郷出版社、二〇一八年、二七三～二八二頁）。従うべきであろう。

（21）林韻柔は、『宋高僧伝』の大暦一二年の事績は「聖寺記」から引用したものであるとする（前掲「記憶与実践　法照伝記的化境叙事与歴史記憶」二七六頁）。『広清涼伝』が大暦一二年の事績についてほぼ同文を載せるからには、この箇所についても、『広清涼伝』は『宋高僧伝』と同じ資料を用いていたはずである。塚本がいうように、『広清涼伝』の用いる「石紀」とは「聖寺記」と同一なのであり（塚本前掲「唐中期の浄土教　特に法照禅師の研究」三一四頁）、両者はともにこれを用いたのだろう。両書の類似が法照伝全体に及ぶことを考慮するに、むしろ、「聖寺記」「石紀」が法照伝全体の素材となった可能性も考慮するべきかもしれない。

（22）「覬」、『大正』は「示」。

（23）「无着」、『大正』は「無著」。前田本は、『大正』が「無」と書く箇所をまま「无」と書く。以下は繁を避けるため本文に引用する前田本『広清涼伝』中の「无」と、『大正』中の「無」の異同は示さない。

（24）「供養事」、『大正』は「供養之事」。

（25）黄庭碩氏のご教示による。記して感謝申し上げる。

（26）「倦」、『大正』は「勧」。

（27）『法華伝記』志遠伝と、『広清涼伝』・『宋高僧伝』の志遠伝の類似と相違は、松森秀幸も詳しく分析する（「『法華伝記』の成立年代と「釈志遠伝」の位置づけについて」『印度学仏教学研究』六八―一、二〇一九年）。松森は志遠の出家年を、前者は「十八」、後者は「二十八」とすること、

本貫地を前者は「江南」、後者は「汝南」とすることについて、出家年を「十八」とするのは『法華伝記』の脱字であり、江南と汝南はどちらかの誤字であろうとする。

(28) 『法華伝記』には「勤行精進二十有年、教教不廃講肆。臨終之時、謂弟子曰、『三十五聖衆來迎、往生淨土』(『大正』五一、五九頁a一八～一九)とのみある。

(29) 「不」、『大正』は「靡」。

(30) 「迹」、『大正』は「跡」。

(31) 「尺」→『大正』は「釈」。

(32) 『宋高僧伝』澄観伝は、末尾で「門人の清沔が記す澄観の平時の行状(門人清沔記觀平時行狀)」を引用しており、これが素材の一つになったことは疑いない。

『広清涼伝』澄観伝には、「その余の事疏は別伝に詳しい」とあるから、延一の手元には、ベースとなった資料以外に、五台山以外における澄観の事績に触れた「伝」と称されるべき資料があったことが知られる。

延一の手元にあった資料と、賛寧が参照した「平時行狀」とが、如何なる関係にあるのかは不明である。ただ、『広清涼伝』澄観伝と『宋高僧伝』澄観伝とは、部分的に語句が類似するので、延一が用いた素材は、賛寧が用いたのと同系統の資料だったことは推定されてよい。ただし『広清涼伝』澄観伝は、志遠伝と同様に、五台山以外での事績は記さない。同時に、五台山で澄観が経験した奇瑞については、延一は『宋高僧伝』にはない情報を豊富に盛り込んでいる。なお本稿の素案を、二〇二四年一一月に台湾中正大学で行われた「第十六屆唐代文化國際學術研討會」で報告した。その際、コメンテーターである林佩瑩氏からは、両史料の差異が意味するところをより総合的に分析するべきとの指摘を頂戴した。尤もである。別稿にて、林氏の指摘に応えたい。

(33) 「人」、『大正』は「人也」。

(34) 「五臺山」、『大正』は「五臺」。

(35) 「五臺山」、『大正』は「臺山」。

(36) 「欣」、『大正』は「忻」。

（37）「處」、『大正』は「覆」。

（38）「雨涙」、『大正』は「涙流」。

（39）楊志飛前掲『賛寧『宋高僧伝』研究』は、『宋高僧伝』仏陀波利伝のソースを「経序」とする（二八七頁）。楊志飛は、『宋高僧伝』の版本・思想・体列・執筆のソースについても、先行研究整理とともに丹念な検討を加えている。なお、『宋高僧伝』釈窺基伝は、窺基の名を考察するにあたって『開元録』を参照しており（本文末掲載の史料編参照）、賛寧が本書を用いていたことは間違いない。

（40）『広清涼伝』は、訳出した経典は宮中に秘匿し、仏陀波利らには絹を下賜した高宗に対し、仏陀波利が、経典を中国にもたらしたのは「財宝を（得たいと）思ったためではなく、名声を（得たい）と思ったためでもない（不以財寶為念、不以名利關懐）」と奏上し、経典の返却を求めたと伝える。仏陀波利に与えられた絹が多いほど、その高潔さは強調されよう。

なお、仏陀波利伝以外でも、

「宣宗踐阼、重興寺宇、勅五臺諸寺、度五**千**僧。」（「釋智顒伝」『広清涼伝』巻中『大正』五一、一一一八頁a三～四）

「宣宗即位、勅五臺諸寺、度僧五**十**人。」（「釋智顒伝」『宋高僧伝』巻二七）

と『宋高僧伝』で「十」とあるものを、『大正』の『広清涼伝』は「千」と書くことがある。前田本『広清涼伝』は「十」である。五台山のみで五千人を出家させるわけはなく、誤写したか、数を誇張したのだろう。

（41）「降」、『大正』は「隆」。

（42）「鉅」、『大正』は「巨」。

（43）この時期の五台山内で、種々の「伝記」が作成されていたらしいことは増記隆介「『心現観音図』と五台山図」（『院政期仏画と唐宋絵画』中央公論美術出版、二〇一五年、初出二〇一四年）二二一頁。

（44）『宋高僧伝』成立から百年ほど後に、禅宗の覚範慧洪（一〇七一～一一二八）は禅僧に冷淡であるとして『宋高僧伝』を批判した（牧田諦亮「賛寧とその時代」『牧田諦亮著作集　第四巻』臨川書店、二〇一五年、初出一九五三年、三〇七～三〇九頁）。

（45）「等」、『大正』は「寺」。

（46）「従居」、『大正』は「徙居」。

(47) 「十寺」、前田本は「十」を脱する。上句との対であることから、『大正』に従い「十」を補う。

(48) 中田美絵「沙陀の唐中興と五臺山」（原田正俊編『日本古代中世の仏教と東アジア』所収、関西大学出版部、二〇一四年）二六頁。

(49) 「名徳、師」、『大正』は「召師」。

(50) 中田、前掲論文。

(51) 延一は、常遇が李克用の招きを断ったことは記す（「時に武皇が河東におり、高徳を敬慕して、山に（使者を）行かせて拝礼させた。文徳元年夏四月、憲州刺史の馬師素に、意を伝えさせ（李克用のもとに）招こうとしたが、師は決してこの命を受けなかった。（**時武皇**之在**河東**也、**嚮**慕高**徳**、**就山致**礼。**文徳元年夏四月、命憲州刺史馬師素、傳意邀請**、師固不受命。）」）。太字は『宋高僧伝』との一致を示す。

(52) 「福」、前田本は「禧」と誤る。『大正』に従った。

(53) 「之」、『大正』にこの一字は無い。

(54) 「七十三」、『大正』は「七十有三」。

(55) 「五十三」、『大正』は「三十有二」。

(56) 「院西北」、『大正』は「院之西北」。

(57) 「恵」、『大正』は「慧」。

(58) 「僧衆」、『大正』は「衆」。

(59) 「聖宋」、『大正』は「宋」。

(60) 「紫衣」、『大正』は「衣」。

(61) 「功」、『大正』は「工」。

(62) 延一は、契丹のことは「北朝」という（「異日、辨裝之地々（北地カ）縁化。北朝寧王与夫人、先夢見師化縁修造、及師達境、一見如舊。既符先夢、大施金幣」「睿諫伝」『広清涼伝』巻下）。契丹を「北朝」と称することは、後晋以来、北宋に至るまで見出せる（毛利英介「澶淵の盟の歴史的背景―雲中の会盟から澶淵の盟へ―」『史林』八九―三、二〇〇六年、八六～八九頁）。

史料編

『広清涼伝』

僧牛雲者、雁門人也。俗姓趙氏。童蒙之歳、有似癡憃。父母送之饇〈戸肯切。學堂也〉舍、都無記覽之意。獨見僧尼、擎跽作禮。年十二、其親送之〈往也〉花嚴寺善住閣院出家、禮淨覺為師。每令汲水拾薪、衆皆譏其庸鈍。年滿受具、殊無誦習。洎三十六才季冬月、乃發至誠内、自惟忖曰「我見人云臺上每有文殊現身。我今跣足而去。若見文殊、唯求聰明、學誦經法」。

時方雪寒、心無退憚。先至東臺頂、忽見一老人然火而坐。雲門曰「如此雪寒、從何方而来」。老人曰「吾從川下来」。雲曰「爲何道上。全無脚跡」。老人云「吾從雪前来」。老人復詰雲曰「師有何心願、日月雪跣足而至。豈不苦也」。雲曰「吾雖得為僧、自嗟懞鈍不能誦念經法」。老人曰「来意若何」。曰「求見文殊菩薩、惟乞聰明」。老人云「奇哉」。老人又曰「此處不見文殊菩薩。更擬何之」。雲曰「更上北臺」。老人曰「吾亦欲去」。雲曰「同去得否」。老人曰「請師先行」。雲乃遊遍臺頂告別。老人向西而去。至暮方抵北臺、已見老人然火而坐。牛雲驚疑、謂老人曰「適向東臺、相別吾先来。何為老人已至」。老人云「師不知要路。所以来遲」。雲雖承此語、心謂「祇此老人、應是文殊也」。師乃禮拜。老人曰「吾是俗人。不應作禮」。師但設拜、情更不移。良久老人云「休禮。候吾入定、觀汝前身作何行業而闇鈍也」。老人纔似閉目。遽即語云「汝前生

『宋高僧伝』

釋牛雲、俗姓趙、雁門人也。童蒙之歳、有似神不足。遣入鄉校、終日不知一字。惟見僧尼、合掌有畏憚之貌。年甫十二、二親送往五臺華嚴寺善住閣院出家、礼淨覺爲師。每令負薪汲水、時衆輕其朴鈍。多以謔浪歸之。年滿受具、益難誦習。及年三十有六、乃言曰「我聞臺上恒有文殊現形。我今跣足而去。儻見文殊、惟求聰明、學誦經法耳」。

時冒寒雪、情無退屈。至東臺頂、見一老人然火而坐。雲問曰「如此雪寒、從何而來」。老人曰「吾從川下來」。雲曰「從何道上。何無履跡」。曰「吾雪前來」。老人却問雲曰「有何心願、犯雪徒跣而至。豈不苦也」。雲曰「吾雖爲僧、自恨昏鈍不能誦念經法。此來欲求見文殊、只乞聰明果報」。

老人曰「奇哉」。又曰「此處不見文殊。更欲何之」。雲曰「欲上北臺去」。老人曰「吾意亦然」。曰「請師先行」。雲乃遊遍臺頂告別。老人自西而去。薄暮方到北臺、又見老人然火而坐。頗爲驚怪。問曰「適於東臺相別。爲何先至」。老人曰「師不知要路。所以來遲」。雲雖承此語、心乃猶豫「只此老人、莫應文殊也」。雲乃鳴足礼拜。老人曰「吾俗人也。不應作礼」。唯貪設礼、情屬不移。良久老人云「休礼。候吾入定、觀汝前身作何行業而昏鈍也」。老人閉目。倏爾開顔、

為牛。因載寺家蔵經、今得為僧。従牛中来、因暗鈍爾。於龍堂邊取一鑊来。與汝厮却心頭淤肉、即明快也」。

雲遂依言向龍堂邊、果得一鑊、度與老人。曰「汝但閉目。候吾令汝開眼、即可開之」。師依似覺當心被厮。身无痛苦、心乃豁然。如闇室之遇燈燭、若昏夜之吐日月。老人云「開眼」。師目既啓、即見老人化文殊像。語雲曰「汝自今已去、誦念經法、渉歴耳目、無忘失也。於花厳寺澗東院、有大因縁。無得退轉」。雲乃不勝悲戀。伏地而禮。

未擧頭頃、菩薩已隱。師即下山、肢體輕便。習誦經典、眼見耳聞、無不總持矣。来年夏五月、遶育王塔、行道念經。至夕二更初、修見直光一道、従北臺頂、連瑞塔基、久而不散。於光明中、當閣上、現閣一坐。光色煥爛、前有牌額、題金字云「善住之閣」。師乃憶菩薩所受之言。依光中所現之閣、而建置焉。

至唐明皇帝開元二十三年、師年六十三、夏臘四十四、无疾而終。

佛陀波利者、唐言覺愛、北印度罽賓国人。亡身徇道、遍覧霊跡。

聞文殊師利在五臺山清涼山、遠渉流沙、躬来礼謁。

以唐高宗大帝儀鳳元年至五臺山。南陟思陽嶺、見林木干雲、景物殊勝、内心欣懌。五體投地、向山頂禮曰「如来滅後、衆聖潜霊、惟有大聖文殊師利、於此山中、汲引群生、教諸菩薩。波利所恨、

語雲曰「汝前生爲牛來。因載藏經、今得爲僧、而闇鈍耳。汝於龍堂邊取一鑊來。與汝厮却心頭淤肉、即明快也」。

雲遂得鑊、度與老人。曰「汝但閉目。候吾教開、即開」。因閉目。次有似當心施鑊。身無痛苦、心乃豁然、似闇室立於明燈、巨夜懸於圓月也。雲開目、乃見老人現文殊像。語雲曰「汝自後、誦念經法、歴耳無忘。又於華厳寺澗東院、大有因縁。無得退轉」。雲乃行悲行泣、接足而礼。

未擧頭傾、不見菩薩矣。雲後下山、四支無損。凡曰經典、目所一覧、輒誦於口。明年夏五月、遶育王塔、行道念經。至更初、乃見一道直光、從北臺頂、連瑞塔基、久而不散。於光明中、現寶閣一所。前有金牌、題云「善住」。雲憶菩薩授記之言、依光中所現之閣、而建置焉。道化施行、人咸貴重。

於開元二十三年、無疾而終。俗齢六十三、法臘四十四矣。雲名亡上字。承文殊記識本迹爲牛。故時號之焉。

釋佛陀波利、華言覺護、北印度罽賓國人。忘身徇道、遍覧霊跡。

聞文殊師利在清涼山、遠渉流沙、躬來禮謁。

以天皇儀鳳元年丙子、杖錫五臺。虔誠礼拜、

生逢八難、不睹聖容、遠渉流沙、故来礼謁。伏乞慈悲普處、令覩尊儀」。言已悲泣雨涙、向山頂礼已。擧首忽見一老人、從山中出来。作婆羅門語、

謂波利曰「師情存慕道、追訪聖跡、不憚劬勞、遠尋霊異。然漢地衆生、多造罪業、出家之輩、亦多犯戒律。西土有佛頂尊勝陀羅尼經、能滅一切衆生悪業。未知師頗将得此經来否」。波利報曰「貧道直来禮謁、不将經来」。老人曰「既不将經、徒来何益。縱見文殊、亦不可識。師當却廻、取此經至、流傳斯土。即是遍奉衆聖、廣利群生、拯済幽冥、報諸佛之恩也。師如取得經来、弟子即示師文殊所在」。波利得聞此語、不勝喜躍。遂裁抑悲涙、至心礼拜。擧頭之頃、不見老人。僧大驚愕、倍更虔誠。畢志捐生、復還西域、求佛頂尊勝陀羅尼經。至永淳二年、廻至長安。具以事上聞。高宗大帝遂留經入内、請日照三蔵法師、及敕司賓寺典客令杜行顗等、共譯唐本。敕施僧絹三十疋、經遂留内中。僧泣奏曰「貧道捐軀委命、遠取經来、意願普済群生、救拔苦難。不以財寶為念、不以名利關懐。請還經本流行。庶使含霊同益」。帝遂留新翻之經、還僧梵本。乃将詣西明寺、訪得通梵僧唐順正、奏共翻譯、帝可其請。波利遂對諸大徳、与順正譯訖。波利持本、再至五臺山。相傳入金剛窟、于今不出。僧順正等、具波利所述聖誨、序之經首云耳。

僧無著者、姓董氏、温州永嘉人也。天姿穎拔、毅然不群。爰自童

悲泣雨涙、冀睹聖容。倏焉見一老翁、從山而出。作婆羅門語、

謂波利曰「師何所求耶」。波利荅曰「聞文殊大士、隱迹此山。從印度來、欲求瞻礼」。翁曰「師從彼國將佛頂尊勝陀羅尼經來否。此土衆生、多造諸罪。出家之輩、亦多所犯。佛頂神呪、除罪祕方。若不齎經、徒來何益。縱見文殊、亦何能識。師可還西國、取彼經來、流傳此土。即是遍奉衆聖、廣利群生、拯接幽冥、報諸佛恩也。師取經來至、弟子當示文殊居處」。波利聞已、不勝喜躍。裁抑悲涙、向山更礼。擧頭之頃、不見老人。波利驚愕、倍増虔恪。遂返本國、取得經廻。既達帝城、便求進見。有司具奏、天皇賞其精誠、崇斯祕典、下詔鴻臚寺典客令杜行顗與日照三藏、於内共譯。譯訖餙絹三十匹、經留在内。波利垂泣奏曰「委弃身命、志在利人。請帝流行。是所望也」。帝愍其專切、遂留所譯之經、還其梵本。波利得經、彌復忻喜。乃向西明寺、訪得善梵語僧順貞、奏乞重翻、帝愈其請。波利遂與順貞、對諸大德翻出。名曰佛頂尊勝陀羅尼經。與前杜令所譯者、呪韻經文少有同異。波利所願既畢、却持梵本、入于五臺、莫知所之。或云、波利隱金剛窟。今永興龍首岡、有波利藏舎利之所焉。（以下法照の事績は省略）

釋無著、永嘉人也。識度寛明、秉操貞確。留神大道、約志遊方。

蒙、岐嶷成性。年十二、依本州龍泉寺大徳猗律師出家。

誦大乗經數十萬偈。唐天寶八年、以業優得度。二十一歳、始紹師業、首習毘尼、因詣金陵牛頭山忠禅師、参受心要、勵節無虧、寸陰不捨、研窮理性、妙契本洹。忠師謂曰「汝志性聰慜。宜自開發。衆生与佛、元無別心。如雲翳若除、虚空本浄」。无著言下頓開法眼。東山秘旨、有所帰焉。雖道无不在、而境勝易従。遠詣臺山、志求大聖。大暦二年正月、發跡浙右。夏五月初、至清涼嶺下。時日暮、倏見化寺。鮮華絶世。因扣扉請入。有一童子、白名朐胝者、啓扃出應。无著請童子、入白寺主、以昏夜寓宿。童子得報、延無著入。主僧賓接、如人間禮。問「師自何来」。无著具對。又曰「彼方佛法如何」。答「時逢像季、随分戒律」。復問「衆有幾何」。答「或三百、或五百」。無著曰「此處佛法如何」。答云「龍蛇混跡、凡聖同居」。又問「衆有幾何」。答云「前三々与後三々」。無著乃良久無對。主僧云「解否」。答云「不解」。主僧曰「既不解、速須引去、無宜久止」。命童子送客出門。無著問云「此寺何名」。答「清涼寺」。童子曰「嚮来。所問前三々与後三々、師解否」。曰「不解」。童子曰「金剛背後、爾可覷之」。師乃廻視、化寺即隱。無著愴然久之、即說偈曰「廓周沙界聖茄藍、滿目文殊接話譚、言下不知開佛印、廻頭秖見舊山巖」。無著既出、坐而待旦、天曉即路。是月望日、届花嚴寺衆堂安止。六月朔日、維那白云「齋後大衆各備盞啜茶」。有一老人、持盞付無著云「啜訖、送金剛窟来」。无着受教。少頃抵于京師雲華寺、就澄觀法師、研習華嚴之教。凡諸經論、志極旁通。然於華藏海、終誓遨遊。

以大暦二年、入五臺山、肆欲覲聖人之境界。五月到華嚴寺挂錫。

始於堂中啜茶、

茶畢、衆散。無著坐食堂南牀上、見一老僧踞北牀。問無著云「師従南方持得好念珠来否」。

無著云「無。但有麤珠爾」。老僧請看、無著與之、遂失所在。

翌日中昃、坐般若院經蔵樓前、有二吉祥鳥。當無著頂上、徘徊飛翔數匝、東北而去。越三日、景正東時、坐房中見白光二道、至无著頂上而滅。同房僧法賢等具見。無著大駭曰「是何祥瑞。乞再現之、決弟子疑納」。言訖再現、久而方滅。無著是日正中時、獨詣金剛窟。既至、禮十餘拜、即坐而少憩、忽如昏寐。睡中聞人叱牛數聲、似令飲水者。無著驚覺、修見老人。年及耄期、幣巾紵服、足履麻屨、牽牛而行。无著前執老人手、因拜問云「従何方来」。曰「従山外丐糧去来」。無着曰「家居何所」。曰「在此臺山」。老人問云「師何因来此」。無著曰「傳聞此地有金剛窟。故来礼拜」。老人曰「師困耶」。無著曰「不也」。「師既不困、何縁昏睡」。無着曰「凡夫昏沈、何足為怪」。老人曰、「師若昏沈、請師少息、啜茶去得否」。無著許諾。老人手指東北。

無著隨觀、見一寺、僅五十餘歩。老人牽牛前導、無着踵後、既抵門闔。老人呼君提數聲、有童子啓扉而出、見無著伸禮。即牽牛先入、老人延無著入。但見其地平坦、浄瑠璃色、堂舎廊宇、悉皆黄金、其堂三架、東西掖各一楹。老人延無着升堂、自坐柏木牙牀、指一錦褥令无着坐。童子送茶二器、皆琉璃碗。酥・蜜各一器即玳瑁。禖老人謂無著云「南方有此物無」。無着云「無」。又曰「南方見老僧寢陋據北牀。問曰「子従南方來、還齎數珠、請看」。

著乃躬度之。廻視之間、失僧之所。于時神情悄悦、疑喜交生。曰「昔僧明入此、睹石臼木杵。後得入聖寺、獲見聖賢。我願止此。其爲快乎」。次由般若經樓、見吉祥鳥。羽毛蒨絢、雙飛于頂上、望東北鼓翼而去。明日有白光兩穗、入戸悠颺、少頃而滅。同房僧法等見。而驚怪言曰「此何祥也。願期再現、斷衆生疑」。尋睹光如前。因往金剛窟、望中致禮、方坐假寐。聞叱牛三聲云飲水。一翁、古貌瑰形、服麤短褐、曳麻屨、巾裹甚異。

著乃迎執其手、問「從何來」。

翁曰「山外求糧用來」。「居在何地」。云「求糧用在臺山」。翻質著云「師何戻止」。荅曰「聞此有金剛窟。故來隨喜」。翁曰「師困耶」。荅曰、「否」。曰「既不困憊、何輒睡乎」。著曰「凡夫昏沈、胡可怪哉」。曰「師若昏沈、可去啜煮茶乎」。翁指東北見精舍。相距數歩餘。

翁牽牛前行、著躡蹤而隨至寺門。喚均提三聲、童子應唯開闔。年可十四五、垂髮齊眉衣褐襦。牽牛入寺。見其地盡是瑠璃、堂舎廊廡、皆耀金色。其間華靡、非人間之制度。翁踞白牙牀、指錦墩揖著坐。童子捧二甌茶。對飲畢、擎玳瑁器、滿中蘇酪、各賦一匙。著咽之如有所證、神府明豁、悟宿事焉。

既無此物、甚裏喫茶」。無着不對。老人曰「且喫茶」。啜畢、老人曰「師出家作何事業」。無着云「都無事業。大小乘中、亦無功課、遣日而已」。

老人曰「師初出家時、本求何事」。曰「本求大乘」。曰「師以初心修習即得」。復問「師年幾許」。曰「三十一」。老人曰「師年至三十八、宿福必至。復於此地有緣」。謂無着云「徐而歸。好看道路、勿損手足。吾方且偃息」。無着請留一宿。老人不許曰「師緣有兩伴。不見師歸、即懷憂惱。不當住此。緣師心有執處在也」。無著云「出家之人、有何執處。雖有行伴、亦不顧戀」。老人曰「師受持三衣否」。無著曰「自受戒已来持之」。老人曰「此即是執處也」。無著曰「亦有聖教在。若許住宿、正念捨之」。又曰「曾聽律否」。曰「曾聽」。老人曰「准律明相。小乘無難、不得捨衣。師早下去」。老人即起、無著亦起。相隨至堂前立。老人說偈云「一念淨心是菩提、勝造恒沙七寶塔、寶塔必竟壞微塵、一念淨心成正覺」。

偈畢、顧童子送之出寺。老人撫無著背云「師好去」。

無著即退、至金剛窟邊。

童子問曰「此是何窟」。無著曰「名金剛窟」。

童子曰「金剛下更有何字」。無著思惟久之、謂童子曰「下有般若字」。

童子曰「此即化般若寺也」。無着執童子手、禮一拜取別。

童子曰「廻禮賢聖」。因說偈

翁曰「師出家來、何營何慮乎」。

荅曰「有脩無證。大小二乘、染指而已」。

曰「未知、初出家時、求何心」。著云「求大乘菩提心」。曰「師以初心修即得」。又問「齒臘幾何」。「三十一矣」。翁云「師之純淑、年三十八、則其福根、荄殖此地、而榮茂歟。且徐徐下山。好尋道路、勿傷厥足。吾年老朽、從山外來困極。欲偃息也」。著請寓一宵可乎。曰「不可。緣師有兩伴相隨、今夜不見師歸、憂愁曷已。此乃師有執情在」。著曰「瞿曇弟子、有何執處。雖然有伴、不顧戀他」。又問「持三衣否」。曰「受戒已來持之」。曰「此是封執處」。著曰「亦有聖教在。若許住宿、心念捨之。脫有强緣、佛故聽許」。曰「若依小乘無難、不得捨衣。宜從急護」。翁拂襟投袂而作。著亦趨行。翁曰「聽吾宣偈。一念淨心是菩提、勝造恒沙七寶塔。寶塔究盡碎爲塵、一念淨心成正覺」。著俯聽凝神。謝曰「蒙宣密偈、若飲醍醐、容入智門、敢忘指決。丈人可謂、知言銘刻心府」。

翁喚均提、可送師去。臨行拊背曰「好去」。

著再折腰、與童子駢肩齊步至金剛窟前。問童子「此何伽藍不懸題額」。童子指金剛窟、反問著云「伊何窟乎」。曰「先代相傳、名金剛窟」。童子曰「金剛下有何字」。著惟忖少選曰「金剛下有般若」。

童子莞爾、「適入者般若寺也」。著携童子手、揖顧而別。

童子瞠目視著、如欲吐辭。著曰「送我、可以言代縞帶與玉玦乎」。

曰、「面上無瞋供養具、口裏無瞋吐妙香。心裏無瞋是真寶、無染無著是真如」。說偈已、無著再禮。擧首不見童子、化寺亦隱、唯睹蒼山崔嵬、喬林蓊鬱。無著悲愴戀慕、佇立久之。

因觀所遇老人之地、有白雲湧起、須臾遍谷。見文殊菩薩乗大師子、萬聖翼從。凡食頃間、東有一段黒雲来過、菩薩即隱、少頃雲散。既而遇汾州菩薩寺僧脩政等六人、同至金剛窟、遊禮聖跡。忽聞山石震吼、聲如霹靂。群僧駭怖、奔走映蔓。俄頃而息。脩政等、詢問無著、乃具言所遇之事。修政等、慶聞霊跡、自恨不睹其事、即歔欷久之。乃依無著口、依實録之、傳於遐邇、覬後覧之者、注想霊峰矣。其无着興修供養事、具如別録所載。此不繁述。又花嚴鈔說、無著厥後、常思霊異。一日復往金剛窟、觀禮聖跡、遇一老人。命入無着。推其先入、老人即入、遂不復出。無著窟前佇立、都無所見。忽睹冠裳數人。朱紫服色儼。至窟前、相推而入。无著心疑、因詰其従者曰「此何人也、得入斯窟」。答云「是一万菩薩助帝、揚化諸處、任官歳久、秩滿却歸此窟。蓋大聖文殊師利菩薩、見在窟中、講花嚴經」。無著聞已、欣然随入。行三兩歩、石窟狹小、不容乃止。

釋神英、俗姓韓氏、本滄州人也。齠年悟道、卯歳從師、諷誦精勤、日夜匪懈。事師竭力、五事無虧、操比松筠、心同金石。依年受具、童子遂宣偈受口云「面上無瞋供養具、口裏無瞋吐妙香。心裏無瞋是珍寶、無染無垢是眞常」。偈終恍惚之間、童子及聖寺倶滅、唯見山林土石。悵悵盈懷、歔欷不已。歎曰「緒言餘論、若笙鏞之末響、猶在乎耳」。

諦觀山翁立處、有白雲苒苒湧起、去地尋常許、變成五色雲霓。上有大聖乗師子、而諸菩薩圍遶。食頃、東方白雲一段、漸遮菩薩面、群像與雲偕滅。著倏見汾州菩提寺主僧修政等六人、相將還至窟前作礼。忽聞山石振吼、聲如霹靂。諸僧奔走。良久寂無所睹。著遂隱陳遭遇、六人悔責不見聖容。咫尺緜邈、知罪障之屏翳歟。著遂隱此山而終。元和中、門人文一、追述焉。

釋神英、罔知姓氏、滄州人也。宿緣悟道、卯歳從師、諷誦精勤、日夜匪懈。年當應法受具。

行業益修、每念浮生、速於瞬息。遂乃杖錫雲遊、訪尋知識、早通禪定、兼明經論。遠詣南嶽、參神會和尚。他日、謂英曰「汝於五臺山有大因緣。速須北行、瞻礼文殊大聖、兼訪遺踪」。既承師教、策勵忘倦。以唐開元四年夏六月中旬到山、願禮大聖、止花嚴正院。嘗一日齋後、獨遊西林、忽睹精舍、額題「法花之院」。

神英直入巡禮、俄見多寶佛塔一座。四門玉石形像、細妙光瑩、神工罕及。次後有護国仁王樓五間。上有玉石文殊・普賢像、幷及部従。前三門一十三間、裏門兩掖、有行宮道場。亦文殊・普賢部従。三門外是五臺山十寺血脈圖。巡禮既畢、神英欲出院門、復見衆僧、姿狀神異。心疑化境。遂出門東行、約三十歩、聞闔門聲、廻首視之、略无所見。神英乃悲泣久之。曰「此必大聖所化。我於此地、有大因緣」。即於化院之地、結庵而止。發大誓願「我當如化院、建置伽藍」。居之歳餘、帰依者衆。遂募良匠營搆。不酬工直、所須隨給。遠自易州千里、求採玉石、製造尊像、礱琢精絶、功妙人神。壁畫多是吳道子之真跡。院成工畢、費盈百萬。題号「法花之院」。和尚因即住持。春秋七十有五。一日命諸門人、囑以後事、奄然示滅。年代雖遠、霊塔猶在。

釋道義禅師者、未詳姓氏。本江東人也。受業於衢州龍興寺。神清骨秀、風彩動人。唐開元二十四年四月二十三日、遠自江表與杭州後乃仗錫萍遊、尋訪知識、早通玄話、兼擅論經。相次參神會禪師。謂英曰「汝於五臺山有縁。速宜往彼、瞻礼文殊、兼訪遺跡」。既承指授、以開元四年六月中旬到山瞻礼、於僧厨止泊。一日食畢、遊於西林、忽見一院、題曰「法華」。

英遂入中、見多寶塔一座。暐曄繁華、如法華經說同也。其四門玉石功德、細妙光彩、神工罕測。後面有護國仁王樓。上有玉石文殊・普賢之像。前有三門一十三間、内門兩畔、有行宮道場。是文殊・普賢儀仗。三門外狀、臺山十寺、杳然物外、觀瞻浩蕩、神情恍惝。英試出院、又見衆僧。且非恒所見者、而多詭異。疑預未決。遂出門東行、可三十歩、忽聞閉戸鏗然、廻目視之、了無一物。英乃悲泣曰「此大聖警悟我邪。於此地必有縁矣」。遂於髣髴多寶塔處、結庵而止。乃發願曰「我依化院、建置一所住持」。日居月諸、信施如林、歸依者衆。遂召工匠、有高價者。誓不酬之。乃於易州千里、取乎玉石、用造功德、細妙光瑩、功侔所見。其壁乃王府友吳道子之跡、六法絶妙、爲世所尚。此院前後工畢。因號「法華」耳。英說法住持、其齊整若剪裁焉。後無疾召門人、囑付而終。春秋七十五。今墳塔存矣。

釋道義、江東衢州人也。

開元中至臺山於清涼寺粥院居止。典座普請運柴負重登高、頗有難

僧普守、同遊至臺山清涼寺粥院安止。有主事僧、白普請於東嶺荷薪。道義即以竹鞋一緉〈去聲〉、雇人代行、遂披三事納衣、東北而行。訪尋文殊所在、心自惟曰「大聖是九祖佛師、神用叵測。洪纖隱顕、靡所不知。自恨末法出家、聖賢伏迹。唯此臺山聖境、大攝生霊、金顔玉毫、有時而現。顧自江左、遠達霊山、無有患難、蓋由加持所致。伏願、慈悲廣洽、不擇枯榮、普々示真身。則愚誠願足矣」。於是精心一念、物我都忘。忽擧目頃、見一老僧。身甚偉大、容色暉映、髭髪皓然、頂骨圓起、身掛雲納、神彩嚴峻。乗一百白象、尋嶺而来。道義見之、不覺避路、投身於地、傾心禮足。象行稍疾、俄頃而至。象以鼻觸義、意令禮拜。大聖僧謂義曰「師遠自江表、来陟霊山。不憚艱危、大收勝福。然此臺山一境上下五峰、不論道俗、乃至足踐一土一石、非但滅生死之罪、佛記此等、當来必獲紫金之身。師既到來。因諧果就。自須喜幸。善莫大焉。今日天色雖和、然山頂風冷。即時且去、須取綿衣。明旦登臺、得其宜也」。義遂禮謝。未及再視、象過若風、杳然莫覩。義帰清涼寺、取所寄衣衾、自宵達旦、方至西臺。果遇風寒。義私心自奇前事、莫敢語人。及上臺頂、果睹光瑞・霊塔・八功徳水、罔不周覧。明起中臺、適行半路、復遇昨所見者。乗象老僧、杖錫而来、謂義曰「師可急行及他食次。老僧今日須到太原。一縁赴韋君家齋、二要論少事。然不久別。于後為期。莫遠東西。自有消息」。義禮未畢、俄失所在。義遂前進、至供養所、果與衆僧食次。義復奇之、慰洟色。義將竹鞋一緉、轉貿人荷擔。因披三事納衣、東北而行可五里。

來於楞伽山下逢一老僧。其貌古陋、

心霊、體忘疲倦。直至日昃、略無音信。道義登嶺翹望、挈缾行脚、向中臺頂上、處處巡禮、一心注想大聖真儀。又憶乗象神僧所教、佇伺消息、靡敢懈倦。因出僧堂、南約數十歩、翹首瞻望、忽見一童子、年十三四。衣新黄衫、履新麻履屧。自稱覺一、云「和尚在金閣寺。遣來屈衢州道義闍梨喫茶」。義遽随覺一、向東北行可二三百歩、擧目見一金橋。義即随登。乃金閣寺。

三門樓閣、金色晃耀奪目。大閣三層、上下九間、睹之驚異、虔心設禮。遂入寺庭、堂殿廊廡、皆金寶間飾。獨當門大樓及所度橋、純以紫磨真金成之。義瞻仰不暇、神志若吏、惟竭誠展禮。童子引義入東廂、從南弟一院登門、忽見乗象老僧、當門踞大金縄牀而坐。云「阿師来耶。莫要禮拜。請上階来」。義欲敷坐具屢轉展拜、老僧制之。義不敢拒命、因即昇堂佇立。大聖呼覺一、取小縄牀来、令闍梨坐其縄牀。器物亦是純金。道義合掌頂禮、悚惕而坐。内懐驚歎、莫敢咨詢。少選、大聖謂義曰「阿師從江東来。彼處佛法如何」。義曰「末法住持、少奉戒律。若非自證不可知也」。大聖言「善哉」。義因此方敢啓問、咨和尚曰「此中佛法如何」。大聖曰「此處佛法、凡聖同居、不在名相。但縁利物、即是大乗」。義曰「和尚寺舎尤廣。觸目皆是黄金所成。愚情莫能測度。可謂不思議者也」。大聖曰「然」。遂令覺一将茶及菓食来。既至命義啜食。香味分馥、廻殊常味。食已、大聖復召覺一「送阿師遊十二院」。義與覺一、遍歴諸院脩謁。至大食堂前、多有僧侶、或禅或律、若坐若行。數引一童子、名字覺一。老僧前行。童子呼請義東邊寺内啜茶去。乃相隨入寺、遍礼諸院。見大閣三層、上下九間、總如金色、閃爍其目。

約盈萬。或復受禮、或相承接者。十二院題額各異。東廊六院、大聖菩薩院・觀世音菩薩院・薬王菩薩院・虚空蔵菩薩院・大恵菩薩院・龍蓽菩薩院、西廊六院、普賢菩薩院・大勢至菩薩院・薬上菩薩院・地蔵菩薩院・金剛恵菩薩院・馬鳴菩薩院。義巡謁畢。老僧遣義早帰。寒山難住。道義遂辭老僧、出寺百歩、廻顧已失所在。但空山喬林而已。道義方知化寺。遂廻至長安、大暦元年烈其上事、聞奏代宗皇帝。帝下敕建置金閣寺。詔十節度助修創焉。

釋法照、本南梁人。未詳姓氏。唐大暦二年二月十三日、南嶽雲峰寺食堂内食粥。忽向鉢中、見五臺山。佛光寺東北一里餘有山、々下有澗、々北有一石門。

覺身入石門、行五里許見一寺。題云「大聖竹林之寺」。久之方隱、心極駭異。二十七日辰時、還向鉢中、盡見五臺山。花嚴寺諸寺、了然可觀。地皆金、殊無山林、内外明徹、池臺樓觀、衆寶莊嚴、文殊大聖、及萬菩薩、咸處其中。又現諸佛浄国。食畢方滅。心疑益甚。

因帰院語諸僧衆且問「有人嘗至五臺山否」。時有嘉延・曇暉二闍梨、應曰「某甲曽到五臺山佛光寺安泊」。與師鉢内所見頗同。雖然問知、亦未發心遊禮。至四年夏、在衡州湘東寺高樓之上、九旬老僧令遣義早還所止。山寒難住、唯諾辭出寺、行及百歩廻顧、唯是山林。乃知化寺也。却廻長安、大暦元載、具此事由、奏寶應元聖文武皇帝、蒙敕置金閣寺、宣十節度助縁。遂召蓋造都料。

一僧名純陀、爲度土木、造金閣一寺。陀元是西域那爛陀寺喜鵲院僧。寺成後、敕賜不空三藏焉。義不測其終。

釋法照、不知何許人也。大暦二年、棲止衡州雲峰寺、勤修不懈。於僧堂内、粥鉢中忽睹五彩祥雲。雲内現山寺。寺之東北五十里已來有山、山下有澗、澗北有石門。

入可五里有寺。金牓題云「大聖竹林寺」。雖目擊分明、而心懷隕穫。他日齋時、還於鉢中、五色雲内、現其五臺諸寺。盡是金地、無有山林穢悪、純是池臺樓觀、衆寶莊嚴、文殊一萬聖衆、而處其中。又現諸佛浄國。食畢方滅。心疑未決。

歸院問僧「還有曽遊五臺山已否」。時有嘉延・曇暉二師、言「曽到」。言與鉢内所見一皆符合。然尚未得臺山消息。

暨四年夏、於衡州湖東寺内有高樓臺、九旬起五會念佛道場。六月

入念佛道場。及六月二日未時、五色祥雲、遍覆諸寺。雲中現諸樓閣、々中有數十梵僧、各長一丈、執錫行道。衡州擧郭、咸見阿弥陀佛、及文殊師利・普賢・一萬菩薩、俱在此會。其身高大。衆睹聖現、皆涕泣致礼。洎酉時方滅。法照向晩行道場外、遇一老人。年約七十。告法照曰「阿師嘗發願向五臺山。今何不去」。法照曰、「時難路險、若為去得」。老人曰「師可急去」。

法照却入道場、重發願、「夏滿往臺山、禮拜大聖」。是秋八月十三日、自南嶽與同志十人、

来遊臺山。果無留難。至明年四月五日、方達五臺縣。南遥望對佛光寺、南有數十道白光。擧衆咸睹。六日詣佛光寺棲止。果如鉢中所見之寺。是夜後分、因出房戸、忽見一道光、従北山下来、至法照前。師遽入堂内、乃問衆僧曰「是何光相」。僧答言「此光常有大聖不思議之光」。法照聞已、即具威儀、歩尋其光、遂至寺東北。約一里有山、山下有澗、々北有一石間。及見二青衣童子、八九歳、顔貌端正、倚門而立。一稱善才、一名難陀、相見歡喜、問信禮拜法照云「何故多時、流浪生死。始来相見」。遂引入門、向北行将五里、忽見一金門樓。可高百尺、兼有挾樓。漸至門所、方見有寺。々前有大金橋、金牓題号曰「大聖竹林之寺」。一如鉢中所見。周圓可二十里、中有一百二十院、々中皆有寶塔莊嚴。其地純是黄金、渠流花菓、充滿其中。法照入寺、至講堂内、見大聖文殊在西、普二日未時、遥見祥雲、彌覆臺寺。雲中有諸樓閣、閣中有數梵僧、各長丈許、執錫行道。衡州擧郭、咸見彌陀佛與文殊・普賢・一萬菩薩、俱在此會。其身高大。見之者皆深泣血設礼。至酉方滅。照其日晩、於道場外、遇一老人。

告照云「師先發願往金色世界、奉覲大聖。今何不去」。

照怪而荅曰、「時難路艱、何可往也」。老人言「但亟去。道路固無留難」。

言訖不見。照驚入道場、重發誠願「夏滿約往前。任是火聚氷河、終無退衄」。至八月十三日、於南嶽與同志數人、

惠然肯來。果無沮礙。則五年四月五日、到五臺縣。遥見佛光寺、南數道白光。六日到佛光寺。果如鉢中所見、略無差脱。其夜四更、見一道光、從北山下來射照。

照忙入堂内、乃問衆云「此何祥也。吉凶焉在」。有僧荅言「此大聖不思議光、常荅有縁」。照聞已、即具威儀、尋光、至寺東北。五十里間果有山、山下有澗、澗北有一石門。見二青衣、可年八九歳、顔貌端正、立于門首。一稱善財、二曰難陀、相見歡喜、問訊設礼。引照入門。向北行五里已來、見一金門樓。漸至門所、乃是一寺。

寺前有大金牓、題曰「大聖竹林寺」。一如鉢中所見者。方圓可二十里、一百二十院、皆有寶塔莊嚴。其地純是黄金、流渠花樹、充滿其中。照入寺、至講堂中、見文殊在西、普賢在東。各據師子之

賢在東、各處師子之座說法。次其身及座、高可百尺。文殊左右菩薩萬餘、普賢亦有無數菩薩、前後圍遶。法照至二聖前師子座下、稽首禮已。問二聖言「末代凡夫、去聖時遥、智識轉劣、垢障尤深。煩惱纏蓋、佛性無由顯現。佛法浩浣。未審、修行於何法門、最為其要、易得成佛、利楽群生。唯大聖為断網」。時文殊師利告言「汝以念佛、今正是時。諸修行門、無過念佛、供養三寶、福慧雙修。此之二門、最為其要。所以者何。我於過去久遠劫中、因觀佛故、因念佛故、因供養故、今得一切種智。是故、一切諸法・般若波羅蜜・甚深禅定、乃至、諸佛皆從念佛而生。故知、念佛諸法之王。汝等應當常念无上法王、令無休息」。

法照又問「當云何念」。文殊告言「此世界西、有阿弥陀佛、彼佛願力、不可思議。當繫念、諦觀彼国、令無間断。命終之後、決定往生、彼佛国中、永不退轉、速出三界、疾得成佛」。說是語已、時二大聖、各舒金色手、摩法照頂、而為授記。「汝已念佛故、不久證无上正等菩薩。若善男子善女人、願疾成佛者、無過念佛。則能速證无上菩薩、盡此一報之身、定超苦海」。說是語已、時文殊大聖而說偈言「汝等欲求解脱者、應當先除我慢心。嫉妬名利及慳貪、去却如斯不善意、應専念彼弥陀号、即能安住佛境界。若能安住佛境界、是人常見一切佛。若得常見一切佛、即能了達真如性。若能速断諸煩惱、即能了達真如性。在苦海中而常楽、譬如蓮花不著水。而心清浄出愛河、即能速證菩薩果」。於是文殊師利菩薩、

座、說法之音、歴歴可聽。文殊左右菩薩萬餘、普賢亦無數菩薩圍繞。照至二賢前作礼。

問言「末代凡夫、去聖時遥、知識轉劣、垢障尤深。佛性無由顯現。佛法浩浣。未審、修行於何法門、最爲其要。唯願大聖斷我疑網」。文殊報言「汝今念佛、今正是時。諸修行門、無過念佛、供養三寶、福慧雙修、此之二門、最爲徑要。所以者何。我於過去劫中、因觀佛故、因念佛故、因供養故、今得一切種智。是故、一切諸法・般若波羅蜜・甚深禪定、乃至、諸佛皆從念佛而生。故知、念佛諸法之王。汝當常念無上法王、令無休息」。

照又問「當云何念」。文殊言「此世界西、有阿彌陀佛、彼佛願力、不可思議。汝當繼念、令無間斷。命終之後、決定往生、永不退轉」。說是語已、時二大聖、各舒金手摩照頂、爲授記別。「汝已念佛故、不久證無上正等菩提。若善男女等、願疾成佛者、無過念佛。則能速證無上菩提」。

又說偈言「諸法唯心造。了心不可得。常依此修行、是名真実相」。普賢菩薩、又說偈言「普觀汝及一切衆。常應讓下諸比丘。忍辱即是菩薩因。無瞋必招端正報。一切衆見皆歡喜、即發无上菩薩心。若依此語而修行、微塵佛刹従心現。悉能廣修諸行願、運接一切諸有情、速離愛河登彼岸」。

法照聞已、歡喜踊躍、疑網悉除。復作禮已、合掌而立。文殊師利告言「汝可往詣諸菩薩院、次第巡禮」。法照受教、次第巡禮、遂至七寶果園。其果纔熟、可大如碗。即取食之、味甚香美。法照食已、身意泰然。廻至大聖前、作禮辞退。還見二童子、送至門外。禮已擧頭、遂隱不見。師乃愴然、倍増悲感。遂立石題記。今猶在焉。四月八日、至花厳寺般若院西樓下安止。十三日々中後、法照與五十餘、便同往金剛窟巡禮。到無著見大聖處、虔心禮二十五佛名。凡禮十餘遍、忽見其處、盡是瑠璃七寶宮殿、文殊・普賢・一萬菩薩、及佛陀波利、俱在一會。法照見已、惟自慶喜、隨衆帰寺。是夜中時、向花厳寺西樓上忽見寺。東山半有五盞聖燈。其大如碗。照祝曰「請分百盞」、燈遂分百。再祝曰「請分為千盞燈」、又分千盞。

行々相對、遍於山半。因此忘身、獨詣金剛窟所、願見大聖。於後分至金剛窟、重禮二十五佛名十遍、五會念阿弥陀佛二千口。悲涙啓告、自惟無始悪業、漂流生死、種々剋責躄身、三十餘次自撲。未已、忽見一梵僧、身長七尺、稱是佛陀波利。至法照前語曰「師語已、時二大聖互說伽陀。

照聞已、歡喜踊躍、疑網悉除。又更作礼、礼已合掌。文殊言「汝可往詣諸菩薩院、次第巡礼」。授教已、次第瞻礼、遂至七寶果園。其果纔熟、其大如碗。便取食之。食已、身意泰然。造大聖前、作礼辭退。還見二青衣、送至門外。礼已擧頭、遂失所在。倍増悲感。乃立石記。至今存焉。復至四月八日、於華厳寺西樓下安止。泊十三日、

照與五十餘僧、同往金剛窟。到無著見大聖處、虔心礼二十五佛名。照礼纔十遍、忽見其處、廣博厳淨琉璃宮殿。文殊・普賢・一萬菩薩、及佛陀波利、居在一處。照見已、惟自慶喜、隨衆歸寺。其夜三更、於華厳院西樓上忽見寺。東山半有五聖燈。其大方尺餘。照呪言「請分百燈、歸一畔」、便分如願。重請「分爲千炬」、言訖便分千數。

行行相對、遍於山半。又更獨詣金剛窟所、願見大聖。

三更盡、到見梵僧、稱是佛陀波利。

今悲泣、有何意耶」。答云「法照遠来、願見大聖」。佛陁波利言「師實願見否」。答「願見」。即令脱屣履、立於版上。曰「師但閉目、随我行」。而遂引法照入金剛窟。見一院。黄金題牓云「金剛般若之寺」。々皆七寶莊嚴、房廊樓閣、都一百七十五間。金剛般若一切經蔵、在寶閣中。遂向大聖、投身作禮、合掌啓告文殊師利言「唯念、何時速證无上正等菩薩、廣度衆生、令入無餘、何時果我無上願海」。發是願已、爾時文殊師利菩薩告言「善哉々々」。再為摩頂授記言「汝心真正、志為菩薩。能於悪世、發斯勝願、利樂群生。如汝所説、必當速證無上菩薩。必能速具普賢無量行願。圓満具足、為天人師、度无量衆」。法照蒙授記已、稽首作禮。又問「未審、今時及未来世、一切同志、念佛四衆、不為名利、勇猛精進、臨終定感、佛来迎接、上品往生、速離愛河否」。文殊告言「決定無疑。除為名利及不志心」。言訖、遂遣童子難陁、

将茶湯来并薬食。法照言「不須薬食」。大聖言「但食無畏」。遂進両碗湯。一碗味甚香美。大聖亦自進三碗湯、并及薬食。其器皆琉璃寶成。既而令波利送出。照意不欲出。大聖告言「不可。汝今此身、元是質尋、不浄之體、不應住此。但為汝今與我縁熟、此一報盡、得往浄土、方始得来」。言訖不見。還在窟前版上佇立。天明獨見一梵僧。告法照言「好去好去。努力々々。勇猛精進」。作是語已、忽然不見。良久遅廻、悲喜不已。始知大聖悲願、難可思議。法照雖睹聖異、不敢妄傳。恐生疑謗。

引之入聖寺。語在覺救傳。

至冬十二月初、遂於花嚴寺入念佛道場。絶粒邀期、誓生浄土、得無生忍、速超苦海、救度群品。如是七日初夜、

正念佛時、忽見一梵僧至道場内。告法照曰「汝所見者臺山境界。何故不說」。言訖而隱。法照心疑此僧、亦未宣露。翌日申時、正念誦次、復見梵僧、年約八十、神色嚴峻。告法照曰「師所見者臺山境界、何不依實記録、普示衆生、令所見聞、發菩薩心、断悪修善、獲大利楽。師何秘密、不向他說」。照答曰「實無有心秘密斯事。恐人疑謗隨於地獄。所以不說」。梵僧告云「大聖文殊、見在此山、尚有人謗。豈況汝今所見境界。但令多人見聞之者、發菩薩心、来登此山、滅無量無邊之罪、断悪修善、稱念佛名、得生浄土。即是利益無量無邊衆生。豈不大哉。何慮疑謗、秘而不說」。法照聞已、答云「謹依所教、不敢秘密」。梵僧微笑、即隱不現。法照方依所教、具前逢遇實録示衆。

江東釋恵從、以大暦六年正月九日、與花嚴寺僧崇暉・明謙等三十餘人、隨法照至金剛窟所、親遇般若院所、立石標誌。

同行徒衆、虔誠瞻仰、悲喜交集。倏聞其處鍠然鍾聲。清音雅亮。衆咸驚歎霊異。謂照師曰「所見不虚」。俱念宿縁多幸、得与同遊、書之精舍屋壁、普使見聞、同發勝心、共期佛果。

後至大暦十二年九月十三日、法照与小師等八人、於東臺同見白光

至十二月初、遂於華嚴寺華嚴院入念佛道場。絶粒要期、誓生浄土。至于七日初夜、

正念佛時、又見一梵僧入乎道場。告云「汝所見臺山境界。何故不說」。言訖不見。照疑此僧、亦擬不說。翌日申時、正念誦次、又見一梵僧、年可八十。乃言照曰「師所見臺山霊異、胡不流布、普示衆生、令使見聞、發菩提心、獲大利樂乎」。照曰「實無心祕蔽聖道。恐生疑謗故、所以不說」。僧云「大聖文殊、見在此山、尚招人謗。況汝所見境界。但使衆生見聞之者、發菩提心、作毒鼓縁耳」。

照聞斯語、

便隨憶念録之。

時江東釋慧從、以大暦六年正月内、與華嚴寺崇暉・明謙等三十餘人、隨照至金剛窟所、親示般若院、立石標記。

于時徒衆、誠心瞻仰、悲喜未已。遂聞鐘聲。其音雅亮、節解分明。衆皆聞之、驚異尤甚。驗乎所見不虚。故書于屋壁、普使見聞、同發勝心、共期佛慧。

自後、照又依所見化竹林寺題額處、建寺一區、莊嚴精麗。便號「竹林」焉。

又大暦十二年九月十三日、照與弟子八人、於東臺睹白光數四。

十餘現。次有黒雲鬖鬖。少頃雲開見五色通身光、々内紅色圓光、大聖文殊乗青毛師子。衆皆明睹。又降微雪。及五色圓光、遍現山谷、不可知數。其同行人小師、純一・惟秀・帰政・遠智・沙彌惟英・行者張希・童子如静等、無不咸見。

其後法照大師、及度大花嚴寺南一十五里、當中臺中麓下、依所逢大聖化寺、時建一寺。仍以「竹林」題号焉。

徳宗皇帝正元年中、有護軍中尉邠〈彼巾切〉國公扶風竇公、施敕賜三原縣莊嚴租利。毎皇帝誕聖日、於五臺山十寺普通蘭若設萬供。命司兵参軍王士詹、撰述

刻石紀頌。其詞略曰、彌陀居西国師宗焉。帝堯在位、邠公輔焉。是知、佛寶国寶殊躅而同體也。竹林精刹、應現以立。西方教主大師法照、自南嶽悟真要、振金錫之清涼。根瑞相以徘徊、躡雲衢而直進。躋靈山入化寺、周歴百有二十院。所睹異光奇跡、具紀於大師實録。海内傳播。故略而不書。茲乃、浄土教主東流也。故卜地而量寺焉。文多不能具載。

釋無染者、未詳姓氏。受業中條山。講四分律・涅槃經・因明・百法論。毎誦花嚴經、至諸菩薩住處品、説東北方有處、名清涼山、従昔已来、諸菩薩衆、於中止住、現有菩薩、名文殊師利、与其眷属諸菩薩衆一万人、俱常在其中、而演説法。仍聞、佛陀波利自西国而来、追求聖跡、

次有異雲鬖鬖。雲開見五色通身光。光内有圓光紅色、文殊乗青毛師子。衆皆明見。乃霏微下雪。及五色圓光、遍於山谷。其同見弟子、純一・惟秀・歸政・智遠・沙彌惟英・優婆塞張希俊等。照後篤窒其心、修練無曠。不知其終。

絳州兵掾王士詹述聖寺記云。系曰、佛成就三身、必居三土。顕正依報莊嚴故、菩薩未霑國土名、但云住處修浄佛國因隨生佛家。故華嚴經有菩薩住處品焉。經云「唯佛一人居浄土」、此下不僭上也。若八字陀羅尼經云「文殊大願力、與佛同境界」、境界浄則説法浄、則三土義齊也。問諸經中、佛住王舎城等、可非住處邪。通曰、此義同名別。或可上得兼下也。又如兜率宮院、是補處浄域・寶陀落・清涼・支提等山、皆是菩薩浄識所變刹土也。若然者、浄土與住處、義同名異耳。如法照入竹林聖寺見文殊浄境也。諸於山嶺見老人童子等、則穢土見聖人。

釋無染者、不委氏族、何許人也。從中條山受業。講四分律・涅槃經・因明・百法論。善者從之、恒念華嚴經、至説諸菩薩住處、東北方金色世界、文殊菩薩與一萬聖衆、從昔已來、止住其中、而演説法、或現老人、或爲童子。近聞、佛陀波利自西國來、不倦流沙、無辭雪嶺、而尋聖跡、高宗朝至臺山思量嶺、啓告扣礼、乃

遇化老人、再令西域取經、入金剛窟、於今不廻。古德既然。

吾豈獨無緣乎。師乃自誓發跡、遊方巡礼、偏訪名公、或遇禅宗、參決理性、或逢講授、探討經義。以唐正元七年、至五臺山、止善住閣。時院僧智顒、為五臺山十寺都檢校、主蹔僧務。師乃依顒、掛錫棲心、為終馬計。常念「文殊化境、非凡庶可登。吾幸居此。豈宜懈怠哉」。

冬即採薪荷衆、夏即跣足遊臺。立志不移、歴二十餘載、凡七十餘次、遊礼諸臺。所遇霊跡、化相金橋・寶塔・聖磬・金鍾・圓光之類、莫窮其數。

最後中臺之東、忽睹一寺、額號「福生」。内有梵僧、數約盈萬。師乃從頭作礼、偏行慰勞。既而面見文殊、亦為僧相。語師曰「汝於此山、宿有因緣。當須供衆。勿得空過」。言訖不見、化寺亦隱、梵僧俱失。師乃歎曰「吾睹茲霊異、豈可徒然。念此危脆之身、有何久固」。乃發誓願、告示四方遊臺僧尼并及信士、每供養一百萬、乃然一指、以誌之。漸及五百萬數、遐邇悉知、王侯不化而自来、金寶不求而自至。千萬供畢、十指皆然。至開成中夏四月、乃白大衆曰「吾於此山、

薄有因緣。七十二次、遊諸聖跡、酬千萬僧供、不出此山。

吾今耄矣。春秋七十四、夏臘五十五。此身難保、危同朝霊。

見老人。即文殊也。利雖云面接、未決心疑。令却往西國取經、詣金剛窟入文殊境界、於今不廻。古德既爾。

吾豈無緣乎。染乃從彼發跡、遍訪名公、或遇禪宗、窮乎理性、或經法席、探彼玄微。以貞元七年、到臺山善住閣院。時有僧智顒、爲臺山十寺都檢校守。僧長之初也。遂挂錫棲心、誓不出山。每念「文殊化境、非凡者之可勝。豈宜懈怠」。

冬即採薪供衆、夏即跣足登遊。春秋不移、二十餘祀、前後七十餘遍、遊歴諸臺。睹化現金橋・寶塔・鐘・磬・圓光、莫窮其際。且曰「松柏之鼠、不知堂密中有美樅乎。言更有愈於諸瑞。吾得少未爲足也」。

最後於中臺東、忽見一寺、額號「福生」。内有梵僧、數可萬計。染從頭礼拜、遞互慰勞。見文殊亦僧也。語染曰「汝於此有緣。當須荷衆。勿得唐捐。有願無行而已」。言訖、化寺衆僧、寂無所睹。染歎而言曰「睹茲霊異、豈可徒然。此危脆身、有何久固」。乃違言廣興供施、每設一百萬僧、乃然一指、以爲記驗焉。漸及五百萬數、遐邇委輸、若海水之入歸塘焉。

及千萬供畢、十指然盡。迨開成中、白大衆曰「吾於此山、

薄有因緣。七十二遍、遊諸聖跡。人所不到、吾皆至止。又不出茲山、已報深願、幸莫大焉。奈何衰老。今春秋七十四、夏臘五十五。

欲於中臺頂上焚一炷香、告辭十方諸佛・一萬菩薩、息心而住。諸徒衆等、各不相代。並是菩薩弟子、龍王眷屬、夙与善業、得住此山。夙夜精勤、省策三業、龍花三會、共結要期。比候下山、恐有留難。珍重而去」。徒衆不曉師意。即共白言「三五日間、早来歸院」。師乃但携瓶錫、唯焚名香、獨与清信士趙華、持蠟布二端・麤麻一秤・香油一斛、於中臺頂、從旦至暮、礼拜焚香。無時暫息、都指飲食、亦不睡眠、念佛虔誠、聲無間断。至夜將半、華訝其歸、曉復至臺頂、見師執志確然不移、轉益精專、倍於常日。師乃告華曰

「吾有密願。已見功成。汝與吾助緣、不得障道。為吾取蠟布・麤麻・香油、將来纏裹吾身。要於夜半子時、然身供養諸佛。吾若道果得成、首度於汝」。花勸諭不止。遂持蠟布、以纏師身、次被以麻、香油漑灌、將從頂煉。師戒曰「吾若有餘骸、助以薪火、々盡灰滅、當須颺散、無使顯異、惑乱衆人」。華即如教、自頭而然、至足方倒。花歎曰「昔聞喜見願力然身。今見上人、繼乎先躅。奇哉」。乃宣告門人、取聚霊骨、就梵仙山南起塔。於今見在。

釋智顔〈於巾切大也〉、亡其姓氏、中山人也。齠齔之年、傑出流輩。甫及弱冠、厭俗遺榮、遠詣臺山、依善住閣院賢林為師。策勵無怠、夙夜忘勞。落綵登壇、戒珠圓潔。天姓節儉、室無長衣。遇有餘資、随施貧病。既而辭師訪道、不數年間、大通佛教。講法

及存餘喘。欲於中臺頂上焚一炷香、告辭十方如來・一萬菩薩。或息我以死、誰甘相代。況諸人等並是菩薩門人、龍王眷屬、蒔栽善種、得住此山。夙夜精勤、羇勒三業、龍華三會、共結要期。此時下山、勿有留難」。合掌曰「珍重而去」。衆初不喻其意。皆言「早廻」。染乃但携瓶錫、惟爇名香、遂命季氏趙華、將蠟布兩端・麤麻一束・香汁一斗、於中臺頂、從旦至暮、礼拜焚香。略無暫憩、都不飲食、念佛虔誠、聲無間斷。已至深更、趙氏怪其所以、陟彼崔嵬、見染不移舊止、轉更精專。染謂趙曰

「吾有密願。汝與吾助緣、不得相阻。爲取蠟布・麻・油、將來纏裹吾身。於夜半子時、要然身供養諸佛。吾若得道、相度汝也」。趙氏諫之苦勸不止。將布纏身、披麻、灌油、從頂而錬。言曰「將吾灰骨、當須飄散、無使顯異」。趙氏一從其命、略無移改、從頂而錬、至足方仆矣。趙氏歎曰「昔聞藥王然身。今見上人。奇哉、痛哉」。後門人收眞骨、於梵仙山南起塔。至今在矣。

釋智顔者、中山人也。自幼辭親、來五臺山善住閣院、禮賢林爲師。誦經合格得度。神情爽拔、氣調高峙、於世資財、少欲知足、糲食充腹、麤衣禦寒、

餘有寸帛、未嘗不濟諸貧病也。遊方參翫、預諸講席、傳法華・維

花妙典、窮佛知見、闡維摩勝旨、了不二法門。常念法性幽微、筌蹄権假。乃收跡霊境、掛錫舊居。其如高徳服人、嚢錐脱而露穎、嘉譽流遠、宮鍾繁以飛聲。唐元和年中、衆議請充山門僧首。固讓不獲、俛仰従命。遭時歳艱院、

供施稀曠、院宇蕭疎、鍾磬息韻。衆復叩請為花厳寺都供養主知大常住。即四方聚供之所也。宜其徳必有隣、善則獲應。故値法照・無著・花厳疏主。并尺門龍象、寶池芝蘭。緇素爭依、神霊密祐。時澄觀新製疏畢。衆請頴講花厳大經。繇是日有千僧、齋供豊腆、帑蔵充溢、不知其由、時人咸謂「感聖米麺」。師自主寺務、凡十余載、有隣院僧義圓者、亦諸僧之翹俊者。以頴久典常住、意其利於資供、既生疑謗、乃搆流言謂「頴心非平等。志務貪婪。脩徳競時、豈當若是」。頴聆斯謗、遽求自退。衆遂許之。師乃即日、拱手而出。是夜有護寺天神、報義圓曰「智頴和尚乃千佛一數。師敢軽言耶。可速求謝咎。若其不然、必沈悪趣矣」。義圓駭懼、詰旦詣頴、礼足悔謝。頴之徳行感召如此。及武宗在位、災滅尺氏、頴蔵匿厳藪、餘衆解散。

宣宗踐阼、重興寺宇、敕五臺諸寺、度五十僧。請再頴為十寺僧首、并都修造供養主。至大中七年夏四月、普供天下巡礼四衆粥、一月既罷。一日語大衆曰「人命如箭、焉能久保。止徇浮華、不求息慮、誰之過歟」。遂退居静室、不出三日、端坐而終。春秋七十七。夏臘五十八。

摩二部、窮源盡理。

後挂錫高峰、息心却掃。

岠元和中、衆辟爲五臺山都檢校守僧長。頴與時遷徙、固辭不允、遂登此職。後遇歳當饑饉、寺宇蕭條。有華厳寺、是大聖棲眞之所。巡遊者頗衆、供施稀疎、院宇倫巡、例稱不迫。衆請爲華厳寺都供養主。時徳不孤。有法照・無著・澄觀之出世也。當觀師製華厳經疏、海衆雲集、請頴爲講主。日供千僧、十有餘祀、食無告乏、皆云「有無盡藏之米麺也」。歳久頗見豊盈。有隣院僧義圓、亦當代之碩徳也。謂頴久知常住、私有謗言「非平等心。是貪饕者也」。

夜有神人報圓曰「僧長是千佛之一數也。汝發輕言。若不悔過、當墮悪道」。圓乃詰朝、嗚足懺謝。有茲驗也。及鍾武宗澄汰、頴遁乎山谷、不捨文殊之化境。未逾歳載、

宣宗即位、敕五臺諸寺、度僧五十人、宣供衣帔。山門再辟頴爲十寺僧長、兼山門都修造供養主。大中七年、與寰海遊臺、四衆建無遮精妙供養一月。日乃謂大衆曰「吾欲暫憩微骸、息心斂迹。佐助衆務、吾無能爲也。付諸俊哲、繼吾遺躅」。乃淨室安坐而滅。春秋七十七。夏臘五十八云。

釋窺基法師、姓尉遲氏、祖諱懿寧国公。
父敬宗、六軍卿冑之職、
任松州都督。伯父敬德、即唐初總管、武略冠古、聲名蓋代、封鄂国公。唐書有傳。昔夫子有四科、羅什有四聖、大唐四弟子。基・光・昉・測。故今疏主、即其一焉。三蔵西域取經既廻、圓教大乗、創流東土。将圖普利、必藉周材。法苑所推、専歸疏主。
至年十七、遂預緇林。特奉明詔、為三蔵弟子。疏主専受大乗三蔵秘訣。
三蔵以謂、廣濟群品、莫大於弘宣。傳付有歸、受命著述、製法花・唯識等疏一百餘部。盛行於世。

釋窺基、字洪道、姓尉遲氏、京兆長安人也。尉遲之先、與後魏同起、號尉遲部。如中華之諸侯國、入華則以部爲姓也。魏平東將軍說六代孫孟都、生羅迦。爲隋代州西鎭將。乃基祖焉。考諱宗、唐左金吾將軍・松州都督・江由縣開國公。其鄂國公德、則諸父也。唐書有傳。基母裴氏、夢掌月輪呑之、寤而有孕。及乎盈月誕彌、與群兒弗類、數方誦習、神晤精爽。奘師始因陌上、見其眉秀目朗、擧措疎略、曰「將家之種、不謬也哉。脫或因緣相扣、度爲弟子、則吾法有寄矣」。復念在印度、時計廻程、次就尼揵子邊、占得卦甚吉、師但東歸、哲資生矣、遂造北門將軍、微諷之出家。父曰「伊類麤悍、那勝敎詔」。奘曰「此之器度、非將軍不生、非某不識」。父雖然諾、基亦強拒。激勉再三、拜以從命、奮然抗聲曰「聽我三事、方誓出家。不斷情慾・葷血・過中食也」。奘先以欲勾牽、後令入佛智、佯而肯焉。行駕累載前之所欲故、關輔語曰「三車和尚」。即貞觀二十二年也。一基自序云「九歳丁艱、漸疎浮俗」。若然者三車之說、乃厚誣也。
至年十七、遂預緇林、及乎入法、奉敕爲奘師弟子。始住廣福寺。尋奉別敕、選聰慧穎脫者、入大慈恩寺、躬事奘師、學五竺語。解紛開結、統綜條然。聞見者、無不嘆伏。凡百楗度跋渠、一覽無差。寧勞再憶。年二十五、應詔譯經。講通大小乗教三十餘本、創意留心、勤勤著述。蓋切問而近思、其則不遠矣。造疏計可百本。奘所譯唯識論、初與昉・尚・光四人同受、潤色執筆、撿文纂義。數朝

又於三蔵大師終後、數年来遊五臺山。

之後、基求退焉。奘問之、對曰「夕夢金容、晨趨白馬。雖得法門之糟粕、然失玄源之醇粹。某不願立功於參糅。若意成一本、受責則有所歸」。奘遂許之、以理遣三賢、獨委於基。此乃量材授任也。時隨受撰録所聞、講周疏畢。無何、西明寺測法師、亦俊朗之器。於唯識論講場、得計於闇者、賂之以金、潛隱厥形、聽尋聯綴、亦疏通論旨。猶數座方畢。測於西明寺、鳴稚集僧、稱講此論。基聞之、慙居其後、不勝悵怏。奘勉之曰「測公雖造疏、未達因明」。遂爲講陳那之論。基大善三支、縱横立破、述義命章、前無與比。又云「請奘師、唯爲己講瑜伽論。還被測公同前盗聽先講」。奘曰「五性宗法、唯汝流通。他人則否」。

後躬遊五臺山、登太行。至西河古佛宇中宿。夢身在半山、巖下有無量人唱苦聲。冥昧之間、初不忍聞。徙歩陟彼層峰、皆瑠璃色、盡見諸國土。仰望一城、城中有聲曰「住住、咄、基公未合到此」。斯須、二天童自城出、問曰「汝見山下罪苦衆生否」。荅曰「我聞聲而不見形」。童子遂投與劍一鐔曰「剖腹當見矣」。基自剖之。腹開、有光兩道、暉映山下、見無數人、受其極苦。時童子入城、持紙二軸、及筆投之、捧得而去。及旦、驚異未已。過信、夜寺中有光。久而不滅。尋視之、數軸發光者。探之得彌勒上生經。乃憶、「前夢、必慈氏令我造疏、通暢厥理耳」。遂援毫次、筆鋒有舍利二七粒而隕。如吳含桃許大、紅色可愛。次零然而下者、狀如黄粱粟粒。一云、行至太原傳法。三車自隨、前乘經論箱袤、中乘自御、後乘

礼文殊菩薩、於花爰寺西院安止。法師常月造弥勒像一軀。日誦菩薩戒一遍、願生兜率。求其志也、感通之應、卓然可觀。又復親書金字般若經畢、有神光瑞雲、縈拂臺宇、輝燿函笥。曰「我无堅志、霊應何臻」。後遊山訖、旋之京師慈恩寺。於永淳二年蟬蛻云爾。開元二十三年三月十五日、有清涼寺普觀禅師、与同造功徳主沙門法會、於中臺頂、造玉石尺迦・文殊・普賢等一部従。神功妙絶。至開元二十四年功畢。後武宗會昌五年、拆天寺宇、例遭除毀。悲矣。

家妓女僕食饌。於路間遇一老父。問「乗何人」。對曰「家屬」。父曰「知法甚精、携家屬偕、恐不稱教」。基聞之、頓悔前非、翛然獨往。老父則文殊菩薩也。此亦卮語矣。隨奘在玉華宮、參譯之際、三車何處安置乎。基隨處化徒、獲益者衆。東行博陵。有請講法華經、遂造大疏焉。及歸本寺、恒與翻譯舊人往還。屢謁宣律師。宣每有諸天王使者執事、或冥告雑務。爾日、基去方來。宣怪其遲暮。對曰「適者大乗菩薩在此。善神翼從者多。我曹神通、爲他所制。故爾」。以永淳元年壬午示疾。至十一月十三日、長往于慈恩寺翻經院。春秋五十一。法臘無聞。葬于樊村北渠、祔三藏奘師塋隴焉。弟子哀慟、餘外執紼會葬。黒白之衆、盈于山谷。基生常勇進、造彌勒像、對其像、日誦菩薩戒一遍、願生兜率。求其志也、乃發通身光瑞、爛然可觀。復於五臺、造玉石文殊菩薩像。寫金字般若經畢、亦發神光焉。弟子相繼取基爲折中、視之如奘在焉。大和四年庚戌七月癸酉、遷塔于平原。大安國寺沙門令儉、檢校塔亭、徙棺見基齒、有四十根、不斷如玉。衆彈指言「是佛之一相焉」。凡今天下佛寺、圖形號曰「百本疏主眞」。高宗大帝製讃。一云玄宗。然基魁梧堂堂、有桓赳之氣、而慈濟之心、誨人不倦、自天然也。其符彩則項負玉枕、面部宏偉、交手十指、若印契焉。名諱上字多出沒不同者。爲以、慈恩傳中云「奘師龍朔三年、於玉華宮譯大般若經終筆。其年十一月二十二日、令大乗基、奉表奏聞、請御製序。至十二月七日、通事舎人馮義宣」。由此云「霊基」。開元録爲「窺

釋志遠、俗姓宋氏、汝南人也。早喪所天、孤養於母、承順顏色、晨夕靡倦。母常讀法花經、精通五卷。師因夙植善本、每念辭榮。年二十八、乃啓母出家、事師之礼、服勞无替。躬執僧役、未嘗違衆。厥後辭師參學、負笈八年、南北兩宗、大通開旨。然於天台頓教、无所宗尚、可謂定慧雙明、思修兼備。後聞臺山靈異、乃結侶同遊。就花嚴寺右小院掛錫、演天台圓頓。

僅四十年。衆因目其院、為天台焉。

至會昌五年、忽絶粒數日、而講課之務、未嘗暫息。及二月十七日、告門人曰「吾平生修進、不欺心口。今獲二種果報。臥安眠覺、而无痛惱。吾所著法花疏十卷、本迹二門、三周記別、開近顯遠。玄門十卷、五義判尺。止觀十卷、其天台宗疏、務在宣闡。並使傳通、基」。或言「乘基」非也。彼曰「大乘基」、蓋慧立·彦悰、不全斥。故云「大乘基」。如言不聽泰耳。猶謹遣大乘光奉表同也。今海内呼慈恩法師焉。

釋志遠、俗姓宋氏、家于汝南。其父早喪、孤侍孀親、承顏之禮、匪遑晨夕。母常念法華經、精通五卷。遠識度明敏、孤標卓然。年二十八、辭親從師。歸依荷澤宗風、晤解幽旨。經營僧事、聯綿六秋。凡諸取給、未嘗混互。自爾辭師尋礼、復經八年、雖博贍兩宗、情猶繫滯。聞天台一枝、該通妙理、定慧雙融、解進於行、十乘境觀、起自一家。修性三德、清涼盛演、因命同輩、追遊五峰、棲遁林泉、履歷前躅。曉六凡四聖之理、了開示悟入之門。百界千如、苞羅性相。即遮即照、破立同時。依正圓融、凡聖平等。豁開心目、物我雙亡。僅四十年、闡揚獨步。遠業精道邈、志苦神和。臥不解衣、食非別請。時歲不稔、樵炊屢乖。每掬水漱流、將期永日。體有瘡疥、手不塗摩。戒檢違修、警愼心口。常以四種三昧、鍊磨身心。至於緘札題尺、頗閑辭翰、蟲篆之美。每有緇素負才學者、異其辯說、或傍搜僻隱、欲爲挫銳、伺之瑕玷、求其勝負。進雖傲然踞席、退乃踧踖赧容。來高我山、去隨四悉。洎會昌四年、春秋七十七、僧臘四十八。忽絶食數朝、而說法罔憚。以二月十七日誡門人曰「吾自生修進、不欺心口。今獲二種果報。臥安覺安、而無痛惱」。又曰「天台宗疏、務在宣傳。法華疏十卷、本迹二門、三周

勿令止絶」。言訖、奄然而逝。春秋七十七、僧臘四十八。

花嚴疏主法諱澄觀、俗戴氏、本越州會稽山陰縣人也。即唐弟八帝肅宗皇帝世、年十三出家。厥後、儒典九流・百家子史、莫不該盡。具戒之後、節操非常。但有名山必遊、勝友皆訪。

記別、開近顯遠。玄文十卷、五義判釋。止觀十卷、境觀雙修。不定頓漸、八教麤妙。遮照平等、行解圓明。一多相即、一藏文句、瑩玉摛金。將踐聖階、降茲罕及。礼懺方等、必假精誠。志之永懷、副吾之意也」。于時、龍象雲萃、櫛比座隅。咸讃希奇、同稱佛號。慈誨之際、奄至遷靈、風慘雲愁、山昏水咽、林巒色變、徒属悽傷。闍維日、諸子奔馳、罔知所詣。

釋澄觀、姓夏侯氏、越州山陰人也。年甫十一、依寶林寺〈今應天山〉霈禪師出家、誦法華經。十四遇恩得度、便隷此寺。觀俊朗高逸、弗可以細務拘、遂遍尋名山、旁求祕藏、梯航既具、壺奥必臻。乾元中、依潤州棲霞寺醴律師、學相部律、本州依曇一、隷南山律、詣金陵玄壁法師、傳關河三論。三論之盛于江表、觀之力也。大曆中、就瓦棺寺、傳起信・涅槃、又於淮南法藏、受海東起信疏義、却復天竺詵法師門、温習華嚴大經。七年、往剡溪、從成都慧量法師、覆尋三論。十年、就蘇州從湛然法師、習天台止觀、法華・維摩等經疏。解從上智、性自天然。所學之文、如昨抛捨、鮑靜記井、蔡邕後身、信可知矣。又謁牛頭山忠師・徑山欽師・洛陽無名師、咨決南宗禪法、復見慧雲禪師、了北宗玄理。觀自謂己曰「五地聖人、身證眞如、棲心佛境。於後得智中起世俗念、學世間技藝。況吾學地、能忘是心」。遂翻習經傳・子史・小學・蒼雅・天竺悉曇諸部異執・四圍五明・秘呪・儀軌、至于篇頌筆語書踪、一皆博綜。

於大歷十一年、来遊五臺。於花嚴寺西般若院安下。疏主至山、前後遊臺四十余遍。後止大花嚴寺、專讀大乗方等方教、華嚴一經、偏所翫習、以自娛心。慶在朝聞、卷不釋手。其時、有善住閣院〈隋朝本名東道場也〉、僧名賢林。亦不測之人也。時充花嚴寺主。乃與寺衆、恭請法師、講花嚴・法花等經、前後五載。法師每謂、華嚴舊疏、旨約文繁。乃自惟曰「竊以、大聖文殊師利表乎真智、普賢菩薩旌乎真理。二法混融、即表毗盧舍那之自體也。理苞萬行、事括千門。廣俞大虛、周齊罔極。大矣哉、即華嚴奥旨歟。我今既措趾文殊聖都、清涼妙域。華嚴勝典、豈得捐乎」。於是、旦暮縈懐、思惟造疏。即自花嚴寺、從住般若院、從容謂衆曰「余来聖地、曠劫希逢、欲屛交遊、澄心造疏。可能為余建閣一座、於上造疏可乎」。寺主賢林等簽曰「允從」。乃募工起手、不日而成。時有温州無著、躬自書梁。義之筆跡、奇哉可觀。功畢、疏主於上起立制疏道場。即唐興元々年四月八日也。朝夕焚祝、心祈瑞應。數日之後、中夜略寢、夢一金人、於疏主前立。師乃以手攬之、從首餐至足而寤。私心喜曰「此必大聖垂祥。是余餐受花嚴之法味、得其粹旨、示造疏始終之兆也」。乃起盥瀬、遽入道場。焚香設礼、慶謝嘉瑞。厥後、若躬對聖容、援毫灑翰。才思如流、精釋微言、未嘗疑阻。遂得七部七處九會之文、渙然在目。自興元々年、迄正元三年丁卯歳十一月五日絶筆。法師既造疏已、乃罄資縁、設千僧會齋、用為顕慶。又欲驗其疏、流通之兆、乃重入道場、禱祈宜應、忽於夜寐、夢見多能之性、自天縱之状。十一年、誓遊五臺、一一巡礼、祥瑞愈繁。仍往峨嵋、求見普賢、登險陟高、備觀聖像。却還五臺、居大華嚴寺、專行方等懺法。

時寺主賢林、

請講大經、并演諸論。因慨華嚴舊疏、

文繁義約、惙然長想。「況文殊主智、普賢主理。二聖合爲毗盧遮那、萬行兼通。即大華嚴之義也。吾既遊普賢之境界、泊妙吉之鄉原。不疏毗盧、有辜二聖矣」。

觀將撰疏、俄於寤寐之間、見一金人。當陽挺立、以手迎抱之、無何咀嚼都盡。覺即汗流。自喜、呑納光明、遍照之徵也。

起興元元年正月、貞元三年十二月畢功。成二十軸。乃飯千僧、以落成也。後常思付授。

忽夜夢、

自身化爲大龍。首枕南臺、尾枕北臺、騰躍其身、復化作千箇小龍、分散而去。疏主覺已、喜曰「斯乃新疏流行之應矣」。於是、花嚴寺主賢林、尚座悟寂、山門十寺都供養主温州無著、并闔山僧衆、身化爲龍。矯首于南臺、蟠尾于山北、拿攫碧落、鱗鬣耀日。須臾蜿蜒、化爲千數小龍、騰躍青冥、分散而去。蓋取象乎教法支分流布也。四年春正月、寺主賢林請講新疏。七年河東節度使李公自良、復請於崇福寺講。德宗降中使李輔光、宣詔入都、與罽賓三藏般若、譯烏荼國王所進華嚴後分四十卷。觀苦辭、請明年入、敕允。及其行至蒲津、中令梁公留安居。遂於中條山棲巖寺住。寺有禪客、拳眉剪髮、字曰「癡人」。披短褐、操長策、狂歌雜語、凡所指斥、皆多應驗。觀未至之前、狂僧驅衆僧洒掃曰「不久菩薩來此」。復次、壁畫散脂大將、及山麋之怪、往往不息。觀既止此寺、二事俱靜。五月内、中使霍仙鳴、傳宣催入。觀至、帝頗敦重、延入譯場刊正。又詔令造疏。遂於終南草堂寺、編成十卷、進呈。敕令兩街各講一遍。爲疏時、堂前池、生五枝合歡蓮華、一華皆有三節。人咸嘆伏。尋譯守護國界主經、觀綴文潤色。順宗在春宮、嘗垂敎令、述了義一卷・心要一卷、并食肉得罪因緣。洎至長安、頻加禮接。朝臣歸向、則齊相國抗・韋太常渠牟、皆結交最深。故相武元衡・鄭絪・李吉甫・權德輿・李逢吉・中書舍人錢徽・兵部侍郎歸登・襄陽節度使嚴綬・越州觀察使孟簡・洪州韋丹、咸慕高風、或從戒訓。以元和年卒。春秋七十餘。弟子傳法者、一百許人、餘堪講者千數。觀嘗於新創雲花寺般若閣下、畫華藏世界圖相。又著隨疏演義四十卷。允齊相請、述華嚴經綱要一卷・法界玄鑑一卷・三聖圓融觀一卷、華嚴・法華・楞伽・中觀論等、別行小鈔疏共三十卷。設無遮

又共設大齋、顕慶新疏。正元年、并州節度使馬遂・代州都督王朝光、各遣使齎供施至山、令請疏主、講其新疏。

毎日可謂座列千僧、聆宣妙典。所出學徒、前後計及千數。其余事疏、具如別傳所云。

釋常遇、姓陰氏、范陽人也。先從本土安集寺出家。師其性淳朴、體貌魁梧、好適林泉、棲心物外。大中四年、杖錫孤遊礼五臺山。尋訪聖跡、止花嚴寺菩薩堂、瞻大聖真容、然右手中指為供養。

後遍歷五頂、大睹祥光、不可勝紀。嘗至西臺、遇古聖跡、名秘麼巖。師稽首之際、忽睹金光、燦爛奪目。漸分雉堞、方勢如城。即古所謂金色世界也。

因問寺僧、々々曰「是地昔有古德住持。名金光照和尚。斯亦因光立謚。必其祥也」。師悲喜交集、誓居此地、乃結廬住止、

滌慮棲神、一入定門、經四十九日、鳥飛花雨、人花香雲、揚袂摳衣、歸依如市。因即創興梵宇、締搆佛宮。十有七年、不下峰頂、禪誦精勤、寸陰無廢。可謂聖力潛通、道出凡境。

至昭宗運季、師示化不常。有時撫掌高聲大笑、或復手執二石相磨。

大會十二中、其諸塑繢形像、繕寫經典、不可殫述。門人清沔記觀平時行狀云「觀恒發十願。一、長止方丈、但三衣鉢不畜長。二、當代名利、棄之如遺。三、目不視女人。四、身影不落俗家。五、未捨執受、長誦法華經。六、長讀大乘經典、普施含靈。七、長講華嚴大經。八、一生晝夜不臥。九、不邀名惑衆伐善。十、不退大慈悲、普救法界」。觀逮盡形期、恒依願而修行也。

釋常遇、俗姓陰、范陽人也。出家於燕北安集寺。襟懷灑落、道貌清奇、晦跡林泉、避脫聲利。大中四年、仗錫離燕、孤征朔雪、祁冱千里、徑涉五峰。詣華嚴寺菩薩堂、矚文殊睟容、施右手中指、沃以香膏、爇以星焰。光騰半日、怡顏宛然。

次遍遊聖境、終始兩期。其所睹祥瑞、不可勝紀。後至西臺、遇古聖跡、曰祕魔巖。乃文殊降龍之處也。遇稽首之際、忽見輕雲金光、爛爛駭目。漸分雉堞、方勢如城。咸曰「金色世界也」。化事畢、復問其處僧曰「是地古德嘗止。國贈金光照大師、名節孤峻、神異不測。載録圖記、人具爾瞻」。遇悲喜交感、久而不已。始結茅茲地、滌慮澄神、入三摩呬多、四十九日、鳥排花雨、人萃香雲、揚袂摳衣、歸依若市。乃剏興佛廟僧宇。十有七年、不下山頂、日以九會雜花五部等法、翫味精課、不遺寸陰。覺聖力潛通、道出凡境。事或礼問、他見莫尋。士嚮庶歸、克念如聖。

洎懿皇運末、遇易舊規、或拊掌大咍、或擊石異語。類不輕之海記、

口云「併合々々」。人不測其由。至唐莊宗呑併朱梁之後、人方悟前語。師神異前知如此。

時武皇之在河東也、嚮慕高德、就山致礼。文德元年夏四月、命憲州刺史馬師素、傳意邀請、師固不受命。

即以其年七月十八日、嘱門人已、

蟬蛻而去。春秋七十二、夏臘五十一。

釋願成、姓宋氏、不知何許人也。家世儒素、遐邇知名、不務浮花、不趨榮利。初其母陰氏、夜夢、庭中雙樹、盡放繁花、俄頃而卸、唯有一枝、獨無彫變、結成珍果。覺而有娠。陰氏心喜、願生男子。既發願已、如期生男、遂名願成。及長從師、猶稱小字。師子襟之歳、出就黌舍、務學明繁、首冠群輩。厥後、棄俗辭親、詣五臺山。依佛光寺僧正行嚴為師。

至大和五年受具。

誦大小乗戒・法花・金剛・佛頂・大悲神呪、用為常務也。武宗世、誅剪釋門、師執志無改。

同楚客之佯狂。及禍發中原、寇盜交騁、夷撤宮壺、鑾輅蒙塵、因省師言、其若合契矣。

時属河東武皇、遥嚮眞德、就山致信。迨文德元年夏四月、命憲州刺史馬師素、傳意邀請。遇曰「浮世之寵辱、我何累哉」。堅拒遠徵、確乎不拔。以其年七月十八日召門弟子曰「爾可檢護戒足、好住餘生。吾與汝決矣」。言訖、儼然蟬蛻。俗歳七十二、僧夏五十一。門人太文等、哀慟哽絶。龍紀初祀、四月十八日闍維、獲設利羅凡數十粒。

文公堅貯孝思、旌建靈塔。銜哀出入、投詣天府。武皇賜贈加等。文武崇烈及嵐・憲等州牧守、例刻清俸、俾助良因。建乎墳塔。即以九月二十五日封窆基塔也。

釋願誠、姓宋氏、望本西河。家襲素風、濬流遠派、不揚冑緒、祖考不書。母陰氏、夜夢、庭樹對發千花、餘花尋謝、獨結一果。乃覺有孕。母啓願心、得娠男子足矣。

十月臨蓐、果如其望、立字曰願誠。後志存小字、不訓法名者、遵慈母之意也。誠少慕空門、雖爲官學生、已有息塵之志。迨棲金地、礼行嚴爲師。嚴即儒宗珪璋、釋氏師子也。一旦、謂誠曰「汝神情朗秀。宜於山中、精勤効節、可不務乎」。大和三年落髪、五年具戒。先誦諸經、悉皆精練。行人属耳、道望日隆。無何會昌中、隨例停留。唯誠志不動揺。

宣宗皇帝即位、重興佛寺、山門再選名德、師為其首、特許脩營佛光一寺。

功畢、尋頒命服、師号「圓相」。就加山門都檢校。至光啓三年六月五日、忽覺氣志衰脩心、乃罄捨衣盂、以充檀施。無幾而卒。後人起塔於寺之西北。

佛光寺乘方禪師者、遺其姓氏鄉里。即解脫和尚尺門之孫也。身長七尺五寸、古貌稜々、垂手過膝、眉長數寸、目有重瞳。礼念六時、行道無息、紹其高蹋、再修梵宮。臺殿横空、等級相次。

有太原士女、造立大聖一軀、擬送山門。路經滹沱、河水泛漲、波濤鼓怒、舟楫傾危。禪師隔岸遥礼、焚香懇啓、水忽絶流。聖像既濟、湍激如故。厥後、忘其年月、示滅於寺。肉身猶在。有碑、居寺西一里。

釋法興、本西京人也。七歳出家、與時流不雜。承侍師長、策勵忘疲。諷妙法蓮花經、暮年成誦。又念淨名金偈、不盈九旬。二本戒經、僅踰一月。日常一過、諷味精通。律軌精嚴、秉持无犯。

来礼聖跡、志楽林泉。隷名佛光、遂有終馬之志。四方供利、身不主持、付嘱門人、修彌勒大閣、凡三層九間、高九十五尺。尊像莊

及大中再崇釋氏、選定僧員、誠獨爲首矣。遂乃重尋佛光寺、已從荒頓。發心次第新成。美聲洋洋、聞於帝聽。飆馳聖旨、雲降紫衣。後李氏奄有幷門。遐奉文殊、躬遊聖地、睹其令範、撫手愜懷、表聞唐天子。

相繼乃賜大師號「圓相」也。就加山門都檢校。光啓三載羞饌、命僧捨衣投施、鐘聲引衆、悉至齋堂。右脇曲肱、寂然長往。建塔樹碑。寺之西北一里也。

釋業方者、即解脫禪師之法孫也。身長七尺五寸、古貌軒昂、垂手過膝、眉長數寸、目有重瞳。人望凛然。礼誦無倦、紹脫高蹋、動合無形、不捨利物、而再修梵宮。

時太原府有士女、造立文殊像一軀、將送入山。到滹池河側、洪波汎漲。方乃隔岸焚香啓告、河爲流減。過文殊畢、水還瀰溢。後終建塔在寺西北一里。肉身見存、而多神異焉。

釋法興、洛京人也。七歳出家、不參流俗。執巾提盥、罔憚勤苦。諷念法華、年周部帙。又誦淨名經、匪逾九旬。

戒律軌儀、有持無犯。

來尋聖跡、樂止林泉。隷名佛光寺、節操孤穎。所霑利物、身不王持、付属門人、即修功德、建三層七間彌勒大閣、高九十五尺。尊

嚴、靡不周備、已至七十二位聖賢・八大龍王・臺山諸寺聖像、萬有餘尊、繪塑悉具。

僧徒稱讃、衆口一辭、列上所屬、請充山門都綱。規准繩、為後世法。大和二年正月、聞空中有聲云「入滅時至。兜率天衆、今即来迎」。師乃澡浴焚香、端坐而滅。建塔在寺西北一里。

降龍大師、俗姓李氏、諱誠惠、本蔚州靈丘縣人也。其龍莊而无嗣。聞五臺山文殊靈異、躬詣祈請。既還、妻即感娠、後月滿生男。鄉閭嗟異、咸云「聖子」。及長、風骨爽秀、神智不群。乃詣臺山、依真容院殿主法順為師。至年二十、登壇受具。東臺東南、約百余里、有池名龍宮者。耆舊相傳、大師嘗居彼、結廬修道。今現有叢樹。故基猶在。師於淨缾中、素畜一龍。々曾逃出、入清水河。中有一臣石、上通三穴潛隱其。一日凌旦、河上西南、見白氣出。師知龍潛其下、乃携缾詣河、向石穴大叱之、龍還入缾、携之歸庵。其泉猶有靈異。雖河水瀑漲淤滓混流、獨此泉中略無纖穢。天禧年中、余親往觀之。今龍泉居店、亦因泉得名也。大師又嘗於西臺東北李牛谷中、亦有結廬誦經之所。常感山神、現身聽法。

後有王子等僧湛崇等、率衆連書、慇請住寺、展師資礼。師不違来、願従居彼寺。

像・七十二位聖賢・八大龍王、磬從嚴飾。

臺山海衆、異舌同辭、請充山門都焉。蓋從其統攝、規範準繩、和暢無爭故也。大和二年春正月、聞空有聲云「入滅時至。兜率天衆、今來迎導」。於是洗浴梵香、端坐入滅。建塔于寺西北一里所。

釋誠慧、元禮之宗盟、祖派蔚州靈丘之故邑。父母深信、注意清涼、因瞻大聖之容、乃乞興邦之子。既而有孕、遂誕賢童。

纔當卯年、器幹天假。自詣臺山、永爲佛子。

時眞容殿釋法順、睹其儁哲、化以苦空、勸捨俗衣、令披法服。暨登具足、尤習毗尼。自後孤遊谿谷、多處林泉。

有王子寺僧湛崇等、

請居茲寺。慧主任之餘暇、内外典教、靡捨斯須、供贍精嚴、非不懃恪。恒轉華嚴經、數盈百部。每至卷終懇發願曰「以我捧經之手、救彼苦惱之人」。而属武皇與梁太祖、日尋干戈、中原未定、武皇

故得金峰增耀、寶壤騰芳、九州之琛賾皆来、寺之樓臺益盛。財施法施、佛田僧田、由師住持、同霑利澤。後唐莊宗、聞師高行、同光元年七月、遣使持紫衣師名敕書賜之。

詔云「誠恵鷲嶺、名流雞園。上哲精守護鵝之戒、弘宣住雁之談。潛栝二乗、深明四諦。忍草長新於性苑、意花無染於情田。自隱跡靈峰、棲心勝地、泛慈舟而極溺、持恵為法宇之棟梁、作空門之標表。朕方興景運、大闡真宗。宜旌積行之名、以奉無為之教。今賜号『廣法大師』、仍賜紫衣」。師固辭不受、續降敕敦勸。其略曰「爰遣内臣、遠頒成命。師号既旌於解行、紫衣無爽於受持。久属當仁、匪宜多讓」。

至同光三年乙酉歳十二月、嘱門人已、枕手而終。

春秋五十、僧臘三十。

師終後、敕賜謚曰「法雨大師」。并霊塔号「慈雲之塔」。今見在本寺。

超化大師、諱匡嗣、俗姓李氏、太原文水縣齊鳳村人也。幼年慕道、不楽世榮。注意臺山、願求披剃。依真容院浩威為師、受具之後、勵志不群。杖錫南方、参尋知識、覺通内外、博究禅律。

中流矢創、痛楚難任。思憶慧師、翹想焚香、痛苦乃息。遥飛雁帛、遠達雞園、命下重巒、迎歸丹闕。武皇躬拜、感謝慈悲、便號「國師」矣。後乞歸本寺。金峰顕耀、玉樹相依、九州之珍寶皆來、百寺之樓臺普建。莊宗即位、詔賜紫衣、次宣師號。

慧堅不受、帝復宣。厥後再朝天闕、更極顕榮。受恩一月、却返五臺。

同光三年乙酉歳十二月、嘱累門人廷珪曰「吾今化縁將畢。為吾進遺表、達于宸聽。宜各努力、理無相代」。言訖入丈室、右脇而終也。俗齢五十、僧臘三十。帝聞惻愴、遣高品監護喪筵。仍敕賜祭三朝。火燼五色骨存、收取舎利、而起塔焉。謚曰「法雨」。塔曰「慈雲」也。

釋光嗣、姓李氏、太原文水人也。沖幼孤靜、

罕雑童稚。信尚臺山、乃為真容院浩威之高足也。納戒後、器宇穹隆、憤繋包桑、出求禅法。歴于年稔、内外之學優長。口海崩騰、

傳法度人、開衆耳目。

晋天禧三年戊戌歳、遊方行化至湖南、謁偽国主王公、々施香茶盈萬。至丁未歳、遣使齎送入山、遍給諸。

癸卯歳、至吳越国、見尚父元帥錢王。々礼接殊厚、語論造微。雅合王意、遂施五臺山文殊大士・一萬聖衆前供物香茶、及製造鉢盂・鎖子萬副・茗荈〈赤兎反茶葉老者也〉百籠、仍遣介送至。

吳越管内諸州刺史、各弁施利、鋪陳供具、無不周備。

別造臣舶乗載、由海路北歸。嘗遇暴風四起、波濤鼓怒。舟人惶駭、頃刻沈没。大師整衣焚香、望山遥礼文殊大聖、乞加冥護。俄頃、見文殊師利出於海上現其半身。猛風駭浪頓恬息。遂達滄州、輿輦歸山。

尋輿降龍大師、均施諸臺寺院・山坊・蘭若、不私其利。

及掛錫舊居、徒衆堅請、主領僧務。厥後朝命、典統山門。

十五年間、興修佛事、及供養衆僧數過百萬。案別傳云、昔湖南馬王、素欽令望、嘗遣使齎茶二百籠、送詣臺山以充大聖前供養。及俵給山門諸寺、後輿大師、偕之臺頂、焚香祈禱。設礼既畢、俱宴龍池之側。忽見一小蛇、其身赤色、躍於水上、廻首盻師。々曰「爾来耶」。乃告其使曰「爾可速歸。懼有大事」。使即依言、輿師俱旋至院。翌日使亦忽忙、策馬而去。比至其主已薨。使乃方悟見蛇之驗。師預見如此。其何人哉。亦不測之人也。主持之外、禪誦為務。

良難抗敵。由是決意、越重湖、登閩嶺、盛談文殊世界、聞者竦動。

忠懿王王氏、大施香茗、

遣使送山寺焉。

癸酉歳、至兩浙、謁武肅王錢氏、厚禮遇之。施文殊・聖衆供物、香茶幷鉢盂

一萬副。

應吳越諸州牧宰、皆刻俸入縁。

仍泛海至滄州、運物入山。

時降龍大師者、率領彈壓。緇伍畏焉、爲其分散諸寺・蘭若、衆寡均等。時徒侶堅請嗣主院。宣補僧官、轄諸臺寺院、命曰「都綱」。師號「超化」。居于僧上、若鯤鳳之領鱗羽焉。

十五年間、興建梵宇、齋飼僧尼、不勝紀極。

以大晉天福九年甲辰歳九月搆疾、五日遷逝。茶毗已後、門人收靈骨舍利起塔。見在。

以天福元年遘疾、至九月五日遷滅。門人起塔蔵其靈骨舍利。至今存焉。

Song-gaoseng-zhuan and *Guang-qingliang-zhuan* as historical material of Mount Wutai

Mayuko KAWAKAMI

Song-gaoseng-zhuan 宋高僧伝 (*The Biography of the High Priests of the Song Dynasty*) is a successor to *Xu-gaoseng-zhuan* 続高僧伝 (*The Biography of the High Priests of the Tang Dynasty*) written by Daoxuan 道宣 in late 7th century, who was an eminent monk of Tang Dynasty, that was compiled by ZhanNing 賛寧 in the 7th year of Taiping-xingguo 太平興国 (982), submitted to the Emperor in the 1st year of Duangong 端拱 (988), and revised in the 2nd year of Zhidao 至道 (996). It contains biographies of monks from the Tang Dynasty to the early Northern Song Dynasty, and is an essential text for studying the history of Buddhism during this period, but its historical reliability has frequently been questioned.

The other work, *Guang-qingliang-zhuan* 広清涼伝 (*The Expanded Book of Mount Qingliang*) was written by Yanyi 延一 of Zhenrongyuan 真容院 in the fifth year of Jiayou 嘉祐 (1060), and was completed in three months. The name "Qingliang 清涼" refers to Mount Seiryo, whose another name is Mount Wutai 五台山. Since the Tang Dynasty, it has been the center of Chinese Buddhism as the mountain where Manjushri 文殊菩薩 resides. *Guang-qingliang-zhuan* is a collection of the stories of Mount Wutai, the miracles that occurred there, and the biographies of the monks who lived and practiced there. It is called *Guang-qingliang-zhuan* because it is an expanded version of *Qingliang-zhuan* 清涼伝 (*The Book of Mount Qingliang*). It is often used as a basic text for research on the history of Buddhism on Mount Wutai from the Tang Dynasty to the early Northern Song Dynasty.

There are 18 monks who have biographies in both books. A closer look at their descriptions reveals that 17 of these biographies are very similar in storyline, idioms and phrases used by both, and even Chinese characters. This similarity can be explained by the fact that Zanning and Yanyi used the same materials, or even materials of the same group — namely materials with differences in description due to additions or corrections made to the original materials and errors made during transcription.

In addition, *Guang-qingliang-zhuan* takes the position that the five dynasties and Northern Song Dynasty which occupied Zhongyuan 中原, Plains in the middle and lower

reaches of the Yellow River, were legitimate, and considers the regimes that opposed them to be "illegitimate 偽," and omits the interaction between the monarchs of the illegitimate regimes and the monks of Mount Wutai. Considering these two historical facts, in addition to the fact that *Guang-qingliang-zhuan* is expanded with stories passed down by the elders in the mountain and *Lingjiji* 霊跡記 (*the Collected Stories about Sacred Places in Mount Wutai*), and that it was written in a short period of three months, *Song-gaoseng-zhuan* should be regarded as the primary source when studying the monks of Mount Wutaishan.